

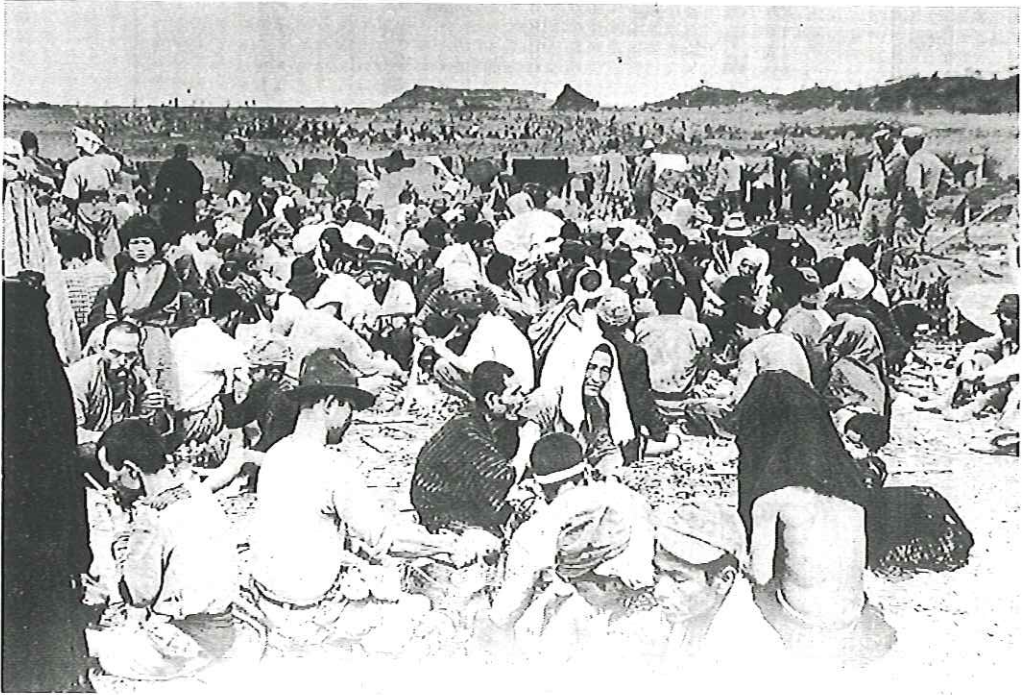
温故而知新可以為師

《論語 為政第二》

豊見城村史だより

第3号 1997・11・25

特集・村民の戦争体験・大城盛昌氏の日記



字伊良波にあった捕虜収容所。遠くに瀬長島とアカサチ森が望める（昭和20年6月）

〔アメリカ世の10年 沖縄戦後写真史〕より

豊見城村教育委員会
村史編さん室

豊見城村史だより第三号 目次

| | |
|------------------------------|----|
| 戦争体験を語り継ぐ…………… | 1 |
| 豊見城村の戦没者（平和の礎より分析）…………… | 2 |
| 部落を挙げて集団疎開…………… | 3 |
| 赤嶺 牛一…………… | |
| 山原疎開について…………… | 5 |
| 上原 ウメ…………… | |
| 学童疎開体験記…………… | 8 |
| 大城 宏一…………… | |
| 私の戦争体験記…………… | 11 |
| 高良 光昭…………… | |
| 学生時代の青春…………… | 15 |
| 運天 祐春…………… | |
| 沖縄戦十七歳の防召兵…………… | 20 |
| 當銘 保一…………… | |
| 「大城盛昌日記」について…………… | 31 |
| 大城 達宏…………… | |
| 豊見城村史第六卷「戦争編」執筆担当・体験記募集…………… | 59 |
| 豊見城村史編纂室業務日誌…………… | 60 |
| 編集後記…………… | 62 |

戦争体験を語り継ぐ

一九四五年（昭和二〇）八月十五日、日本が米英を主力とする連合国軍に無条件降伏してから、早くも五年の歳月が経過した。

平成五年の国勢調査によると、村人口は四万五千二百五十三人（一万二千七百九十三世帯）である。年齢構成では、五〇歳以上の戦前生まれは二一・六パーセント（九千七百七十三人）、五〇歳未満の戦後生まれが七八・四パーセント（三万五千四百八十人）という割合である。

時の流れと共に戦争体験者も減少傾向にあるためか、また、家庭内でもテレビに会話の機会を奪われているせいか、太平洋戦や沖縄戦のことは語られなくなり、記憶はしだいに薄れ、風化しつつある、とも言われている。

しかし、現在でも村内には約一万人の戦争体験者がいる。当時は幼くて戦争の記憶は全くない、という世代も含めて、一万通りのそれぞれの体験がある。

戦争体験記を収集する側としては、単に回顧録、あるいは反戦・平和を強調する立場からの記録ではなく、歴史的にも特筆されるべき過酷な時代を一人の庶民が生きて抜いてきた実体験をできるだけ具体的に子孫に伝えたい、という地域史の立場である。

平成十一年に発行予定の豊見城村史「戦争編」には、約一〇〇名の体験も掲載する計画で、いま体験記の原稿や、体験を語って下さる方を募集中である。

この「村史」だより 第三号」には、体験記の見本として六本を収めました。六名の方の体験を読んで、改めて記憶がよみがえたのではないかと思う。

あなたの体験を次の世代に伝えたい、体験記を寄せることで村史づくりに参加したい、とおもいませんか。どんな体験でも貴重です。ぜひお電話ください。

連絡・村史編纂室（☎八五六―三六七―）

年月別の戦病死者

死亡地別人数

| 年 | 人数 | 年月 | 人数 | 年月 | 人数 | 死亡場所 | 人数 | 死亡場所 | 人数 | 死亡場所 | 人数 |
|-------|----|----------------|-----|-------|------|-------|------|------|-----|----------|-------|
| 昭和元年 | 1 | 昭和19年 | 1 | 昭和20年 | 1 | 豊見城村 | 1144 | 浦添市 | 17 | 本部町 | 4 |
| 2 | 1 | 2 | 13 | 2 | 10 | 旧兼城村 | 184 | 西原村 | 14 | 伊江島 | 6 |
| 4 | 1 | 3 | 8 | 3 | 24 | 旧糸満町 | 63 | 宜野湾市 | 21 | 大宜味村 | 53 |
| 6 | 1 | 4 | 7 | 4 | 338 | 旧高嶺村 | 319 | 中城村 | 68 | 東村 | 1 |
| 10 | 1 | 5 | 7 | 5 | 930 | 旧真壁村 | 608 | 北谷村 | 2 | 渡嘉敷村 | 1 |
| 13 | 1 | 6 | 50 | 6 | 2029 | 旧摩文仁村 | 134 | 越来村 | 56 | 久米島 | 7 |
| 14 | 11 | 7 | 116 | 7 | 234 | 旧喜屋武村 | 265 | 美里村 | 13 | 八重山群島 | 11 |
| 15 | 7 | 8 | 40 | 8 | 213 | 具志頭村 | 17 | 与那城村 | 1 | 県内その他 | 94 |
| 16 | 5 | 9 | 17 | 9 | 101 | 東風平村 | 22 | 勝連村 | 2 | 本土 | 64 |
| 17 | 6 | 10 | 29 | 10 | 107 | 玉城村 | 11 | 具志川市 | 1 | フィリピン | 292 |
| 18 | 13 | 11 | 11 | 11 | 56 | 大里村 | 5 | 読谷村 | 53 | 南洋群島 | 210 |
| 21 | 49 | 12 | 7 | 12 | 37 | 知念村 | 10 | 石川市 | 2 | 中国 | 75 |
| 22 | 2 | 不明 | 17 | 不明 | 57 | 佐敷村 | 1 | 金武村 | 314 | バアニューギニア | |
| 23 | 2 | 19年合計 | 324 | 20年合計 | 4147 | 南風原村 | 24 | 恩納村 | 4 | /ソロモン諸島 | 42 |
| 24 | 1 | (死亡者総数 4,676名) | | | | 旧那覇市 | 4 | 宜野座村 | 22 | 国外その他 | 22 |
| 25 | 2 | | | | | 旧小禄 | 11 | 旧久志村 | 81 | 死亡地不明 | 179 |
| 43 | 1 | | | | | 旧真和志村 | 8 | 旧名護町 | 1 | | |
| 死亡年不明 | 70 | | | | | 旧首里市 | 98 | 旧羽地村 | 15 | 合計 | 4676名 |

| | | |
|----------|--------|--------|
| 一般住民・その他 | 84.43% | 3,948名 |
| 現役兵 | 11.40% | 533名 |
| 雇員 | 3.85% | 180名 |
| 防衛隊 | 0.32% | 15名 |
| 合計 | 100.0% | 4,676名 |

豊見城の戦没者

この集計表は、沖縄県がまとめた「平和の礎」の刻名者名簿をもとに豊見城村分を独自に分析・集計したものである。刻名の対象が昭和元年から昭和43年（原爆被災者）までとなっている。特に昭和19年、20年は月別の死亡者数を集計した。

(平成7年10月現在。分析・集計は豊見城村史編さん室)

身分別死亡者数(上・下)

| 参加内容 | 人数 |
|--------|-------|
| 雇員 | 180名 |
| 壕提供 | 927名 |
| 雑役 | 724名 |
| 兵役 | 533名 |
| 糧秣弾薬運搬 | 316名 |
| 陣地構築 | 124名 |
| 防衛隊 | 15名 |
| スパイ嫌疑 | 1名 |
| 伝令員 | 5名 |
| 広島被爆 | 1名 |
| その他 | 1850名 |
| 合計 | 4676名 |

年齢別・男女別死亡者数

(名)

| 年齢別 | 男 | 女 | 計 | 年齢別 | 男 | 女 | 計 |
|-------|-----|-----|-----|-------|------|------|------|
| 0~5 | 352 | 270 | 622 | 46~50 | 120 | 117 | 237 |
| 6~10 | 153 | 122 | 275 | 51~55 | 112 | 110 | 222 |
| 11~15 | 145 | 117 | 262 | 56~60 | 112 | 139 | 251 |
| 16~20 | 297 | 177 | 474 | 61~65 | 133 | 108 | 241 |
| 21~25 | 204 | 110 | 314 | 66~70 | 105 | 126 | 231 |
| 26~30 | 176 | 101 | 277 | 71~75 | 155 | 113 | 268 |
| 31~40 | 158 | 107 | 265 | 76~80 | 88 | 25 | 113 |
| 36~40 | 134 | 94 | 228 | 81~85 | 4 | 5 | 9 |
| 41~45 | 162 | 99 | 261 | 86~90 | 1 | 0 | 1 |
| 年齢不明 | 70 | 55 | 125 | 合計 | 2681 | 1995 | 4676 |

[大字別・小字別死亡者集計] 総数 4,676名

| 大字名 | 小字名 | 死亡者 | 大字名 | 小字名 | 死亡者 | 大字名 | 小字名 | 死亡者 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 豊見城 | 豊見城 | 296 | 高良 | 高嶺 | 128 | 真嘉部 | 真玉橋 | 149 |
| | 宜保 | 75 | | 平良 | 149 | | 嘉数 | 146 |
| 座波名 | 座安 | 108 | 高入端 | 高安 | 292 | 根差部 | 147 | |
| | 伊良波 | 256 | | 饒波 | 310 | 田頭 | 77 | |
| 喜久嶺 | 渡嘉敷 | 98 | 地覇 | 名嘉地 | 181 | 瀬長 | 93 | |
| | 上田 | 113 | | 我那覇 | 235 | 与根 | 321 | |
| 保栄茂 | 保栄茂 | 444 | 良長 | 金良 | 145 | 翁長 | 540 | |
| | | | | 長堂 | 133 | 不明 | 61 | |

部落を挙げて集団疎開

豊見城村字長堂五番地

赤嶺牛一

(明治三十五年〜昭和六十一年)

昭和十六年十二月宣戦布告するや、破竹の勢いで南方方面の要所、要所を殆ど占領したが、中盤から連合軍は物量にものをいわせ、これまで我が軍の占領した要所を、片端から奪われ、十九年の中旬には、南洋群島のサイパン及びテニアンまでも、彼等の手中におち、もはや沖繩も嵐の前の灯と化したのである。

このような状態に至っては、沖繩も近々戦場化するのは必至であり、県に於いては、戦争に協力出来ない児童及び老人等は速やかに、本土の各県に疎開するよう勧められており、部落の集団疎開及び学童疎開等が始まったのである。

この機に、私達の部落でも字の幹部の打合せにより宮城剛三氏を引卒責任者として、部落を挙げて(県の指定する)宮崎県へ集団疎開する事が望ましいという事になり、早速父兄へ呼びかける事になった。そのまゝとめ役として、私と比嘉君が当る事にし、先は早目に父兄を集める事にした。

尚、県の方針等疎開に対する具体的な方策等に就いて話してもらうために、一豊の校長先生(大城利秀)をお願いし、懇談的に話し合いを進めた。事は大変重大であり、集まった皆さんも真剣であるので細かい処まで質疑応答の結果、殆どの皆さんが賛意を表し八十三人が集団疎開する事に決った。しかし、何時船が来るか不明であるので、いつ連絡が来てもこれに間に合うよう諸準備をしておく事に、話し合いを決めて役場から連絡が来るのを待つ事にした。

五日経った八月十八日夜八時、役場から連絡がきた。明十九日午前七時までに、那覇港の近くに集合せよとの連絡です。早速、比嘉君と二人で各戸連絡はしたが余りにも突然だったので、一部の父兄の反対もあった。結局、連絡通り先に決った全員が疎開する事になった。しかし、乗り物は何もない、子供や老母等、皆さん徒歩である。連絡した全員、通夜で、準備して翌十九日、一行八十三人那覇へ向かった。予定の時間に那覇港近くへ行ったら、貨物船が沖に停泊して居る。係に問い合せた処、船は何時出帆するか、不明であるので、疎開者なら、早く荷物を沖の船に運んでおけ、との連絡である。

比嘉君と二人で八十三人の荷物を小舟で運ぶこと数回、漸く運び終るや汽笛も鳴らずに、船は出帆した。私達の疎開者は全員乗船したので、先は、ひと安心と

いった処だが、一部の疎開者や客は乗船出来ず、右往左往、入り乱れて、大変な騒ぎであった。疎開した翌日から部落では遊ぶ子が見えず、その寂しさは、疎開した家族だけが、味わう寂しさだと思う。ほんとに、耐えられない気持ちである。私も二女と、二人だけ家に残り、妻、子供、孫七名も疎開したので、其の寂しさは私も同じである。其の耐えられない気持ちも私達二人に向けられ、大変な毎日を送って居った。

私達は長堂の将来を憂い、これが最も賢明な策だと思つて疎開を勧めたものの、疎開者に乗せて出帆した船は、消息もわからないし、八月二十一日便、三日あとに出帆した対馬丸は、敵の魚雷に逢い沈没した由、種々の悪い情報が入り乱れて、沖繩中大変な騒ぎである。私は、疎開者一行の無事到着の報を得るまでは、夜もロクに眠りに就けない状態が続いて居った。

一ヶ月程後に、無事宮崎へ到着した由の報に接した時は、全く手の舞足の踏む処を知らず、とはまさに此の時だと比嘉君と二人喜び合った。しかし、疎開先から各家庭への連絡は、現地は食糧の配給が乏しく、大変貧しい生活を続けて居る由、等、其の不満も私達二人に向けられ、全く身の置き所がない毎日であった。

那覇空襲の実態

十月十日未明、東の空から西へつぎつぎ飛来した戦闘機は、最初は友軍機かと思つたら、那覇空港へさしかゝるや爆音とともに忽ち黒煙を挙げ、那覇方面は、一日中、つぎつぎ爆音の連続で空襲となり、一瞬の中に那覇の町は、焼け野原と化してしまつたのである。沖繩が戦場と化した当時、疎開地でも那覇の空襲や本土各所に於ける空襲の実態等を、よく認識し、ほんとうに疎開してよかつたと喜んだという事です。当沖繩に於いても、此のような戦争のこわさと、つぎつぎ起きる本土各地の爆撃騒ぎ等で、戦争の実態をよく認識するようになり、部落でも皆さんが異口同音に、部落挙げて子供達を集団疎開させてよかつたと、喜ぶようになった。

疎開した後の部落に残った人口は一六九人、戦争が済んで生き残つたのは八十三人で、結局戦死者が八十六人、半数以上が亡くなつた事になる。終戦後は全く寂しい思いであつたが、疎開から八十一人の皆さんが、ひよっこり帰つて来たので、部落は、一気に明るくなつた。

疎開先で老婆一人、乳飲子一人亡くなつたようですが、これは食糧の欠乏による栄養失調が原因であつて、やむを得ない事だつたと思つて居るのである。

山原疎開について

豊見城村字我那覇十八番地

上原 ウメ（大正十四年生れ）

私は、大正十四年十二月十四日生れです。今年七十一歳になりきます。

昭和十九年八月頃、石部隊が、家の左側の畑にテントを張り移ってきました。やがて球部隊、武部隊も部落に移ってきました。しかし武部隊はその後、台湾へ転出。その時、船がやられたという情報を聞き、戦はもう目の前にきている事がひしひしと感じられました。義父は、部落の書記をしていましたので、何事も詳しく、南部では、危ないので山原疎開を勧められて義母と主人の弟を連れて山原へ行く事を決めました。主人も私と同じ二十歳で、召集で近いうち兵隊にいくというのに、見送りもしないまま、私達家族は家を後にしました。「私が兵隊に送るから心配するな」と義父に言われたので、お腹の赤ちゃんの為に主人よりひと足早く出発しました。主人も心よく送ってくれました。これが、私たち夫婦の最後のお別れでした。どこで、どういう死に方をしたのか全く見当がつかず、今では心が痛むしだいです。

山原に疎開できる人は、六十歳以上、女は乳飲み子をかかえた人、妊娠している人で、それにあてはまらない人は、区長から許可がおりませんでした。

私達が、家を出たのは十二月だったと思います。山原の疎開地は、大宜味村（ジャナグスク）でした。歩いて学校などに泊まり、与えられたおにぎりを食べて、三日ぐらいかかりました。家も割り当てられて住む事ができました。一ヶ月半くらいすると日々悪くなるばかりでした。私達も家から持ってきた食糧も、少なくなるしこれからどうしようと思っている時に、嫁いだ姉と子供三人と山で会いました。姉達は、食糧を充分持っていましたので分けてもらいました。十日ぐらいたった日に母さんと兄弟五人と山で会いました。母は、荷物は送ったが途中でなくなり一つも荷物を受け取る事が出来ず、途方にくれていました。内地疎開するつもりでしたが、戦争が、悪くなり山原に来たこのことでした。ひとが、山奥に逃げた避難小屋をみつけて暮らしました。毎日のように艦砲射撃で夜も山が、明るく青く光り、ドツスンドツスンと大変な音がしました。山では、水がおいしく感じました。でも上の方では、洗濯している人や浴びたりする人もいましたが、これを飲みました。

島尻に帰れるとの情報を聞いて道案内にお金を渡し、一歩でも島尻に着くように山から谷、谷から山へと歩

き続けました。人が捨てた物があれば何でも拾いました。カンカラ、重い鍋、棒で担いだり、頭に寄せたり、子供達も分担して持ちました。疲れたらどこにもなく草を枕に寝ました。オーヒツタイという所までどこをどう歩いたのか、見当が付きませんでした。庭先に干したソテツも盗んで食べました。芋掘りに行って主に見つかり取上げられもしました。

有銘部落に着いた時は、戦があるとは思えない程、静かで米作でとてもめぐまれた所でした。ティーマの入口でいい方にめぐりあい避難小屋を借してもらい、屋根の下で、寝むるのが久しぶりでした。でも、姉の子が栄養失調で亡くなりました。

数日が過ぎたある日の事、米兵が、ティーマの山狩りに来るといので私達一同は、避難小屋から離れて後の山に隠れました。米兵は、私達の山小屋に火をつけて焼き払いました。私も大きなお腹をかかえて逃げました。火は、後からやってくるのです。山は雑草でおい茂り歩くどころではありません。大変だと思ひ、歩いて逃げるのが、間に合わず上から下まで転がりながらやっと逃げてきました。唯、命だけでもと夢中でした。みんなバラバラになりましたが、大きな声で呼びかわしながら集まりました。

私達が、着いた所はティーマとアブガヨという所で川底を探して暮らしました。天の助けか、雨も降ら

ず干上がった所でした。雨が降れば川は水が流れる所です。ある日米兵が五人くらい水筒を提げ、ガラガラさせながら水を探しに私達の所にやって来ました。戦斗部隊の兵隊は、髪はボサボサで目は青くとてもおっかなく震えてしまいました。その時一人の兵隊が、私の頭を撫でていきました。私はドキッとしました。

それからまもなく七月五日、女の子が生まれました。それが、逆子で産婆さんもなく土地の人が、取り上げてくれました。逆子で時間もかかりました。生まれた時は、喜びの涙がほほをぬらしました。この山奥で親子共死ぬのかと思いました。たった一枚のニクブク（今でいうゴザ）しもなく、人が捨てたのを拾い木につるしての親子が、入れるだけの家でした。雨が降れば、産後熱できつとあの世いきだったでしょう。米二合、かつお一本の三分の一ぐらいが、私の産後の貧しい食べ物でした。何もかも焼き払われて何もありません。赤ちゃんを生んだのは良いが、おしめもなく人がくれたカヤですませ、食べ物土地の人が、海にハツパをかけたあとの死んだ魚を探し、又、半死の魚を私にとみんな気を配ってくれました。食べる物もなく海水を汲んで水を混ぜて炊き、木の葉、草のはっぱ、片っぱしからとって食べました。みんな、みるみるうちにやせてきて、足が、ガクガクして何をするにも動くのが、おっくうになり、すわって日光浴したり、寝て

ばかりでした。あと半月もこんな生活が、続いていたら、みんな餓死していたでしょう。

ある日の事、母が大きなカンカラに海水を汲んできて、一日中炊いて塩をつくってくれました。この塩は少しでしたが、みんなでなめました。この味のうまさ、口にいい表わす事ができませんでした。

七月といえ、負け戦でみんなが、山からおりる頃でした。米兵が私達のところに来て、山からおりるように言われました。赤ちゃんを見せたら納得してタバコとガムをくれて立ち去りました。兵隊もみんなが、悪い人ばかりでない事がわかりました。母と弟を残してみんなが山をおりました。一週間ぐらいたって姉二人が、モッコと棒を持ってきて潮の引いた時にシラキ部落に私を担いでくれました。部落においてからは、配給が少しづつありましたので毎日がごちそうでした。

戦時中に生まれた子も五十歳、いい夫に巡り合い、男の子二人の母です。父の顔も知らずに生まれた我が子に幸多かれと祈るばかりです。夫も帰らぬ人となりました。

シラキ部落においてからは、生活も落ち着いてきました。私達を待っていたのは、マラリアでした。馬小屋みたいな小さな所で二十名くらい、ひしめいて暮らしていました。でも屋根が、あるだけで雨が、降つ

てもぬれずに暮らせるので良い所でした。みんなが、毎日のように交替でマラリアにかかり、とても大変でした。寒くてブルブルふるえて二人乗っかってもふるえが、止まりませんでした。

マラリアにかかると熱が出て、水は飲むしフラフラでした。マラリアで母も亡くなりました。子供達を育てるのに必死でしたので、疲れきって亡くなったと思います。

アメリカ世になってこない生活が、出来たのにもう少し生きて欲しかったです。今では、衣食住も足りて、こんな生活がいつまで続いてくれるかと思えます。今が最高の幸せじゃないでしょうか。もう、これ以上の暮らしは望みません。芋と裸足の生活だった時代に比べれば、本当に天と地がひっくり返ったぐらいの、ぜいたくの暮らしだと私は思います。戦世のことなんか、忘れてしまいそうな気がしてなりません。負けて勝つたのは沖縄だと思います。それは、私一人の想いでしょうか。

こんな、よい生活がいつまでも続く事が、出来ますように祈ります。平和、平和、平和。

平成八年二月

学童疎開体験記

豊見城村字上田六十一番地

大城 宏一（昭和八年生れ）

昭和十九年八月、私は豊見城第二国民学校から宮崎県の北郷村という山村に学童疎開することになった。当時私は小学校の五年生で「学童疎開」という意味がどうということなのかよく理解できなかった。ただ、大きな船に乗って本土に行ける。同年代の友達と一緒に、大発する一〜二週間前のある日、母は水タンクの蛇口から水を流しながら米を研いでいた。米を研ぎながら母が「宮崎へ行ったら手紙を出しなさいよ」と言った。「手紙を出す」というこのありふれた言葉が、私にはどうしようもなく海を越えて遠い所に行くのだとこの時はじめて感じとるようになった。それでも疎開で沖繩を離れるということが強い実感としてまだ湧かなかったのである。

いよいよ出発の日、伏見丸という船に乗り込み、救命胴衣を渡されても不安は殆どなく、友達と一緒に船中をはしやぎ廻った。航海中はとても楽しい思い出として残っている。護衛艦として伴航する巡洋艦

やトビウオ、白い波、青い海、だだっ広い海、そして海をわたる風が私には新しく、新鮮に写った。

船は鹿児島港に到着、私達はそのから汽車で門川駅まで行き、さらにそこから車に移り、いよいよ北郷村についた。その頃はもう十月で冬に向かっていた。朝晩はかなり寒く感じられた。当初は地域の婦人会や団体、個人などから柿やポタ餅、丸い草葉で包んだ餅などの食糧の提供があった。

私達にとつては珍しいものばかりで、着いた当初は大変楽しく、沖繩のことも忘れる程であった。しかし二〜三ヶ月も経つと次第に寒さは厳しくなった。学校への往来も大変つらくなって来た。学校と云っても遠く離れた所ではなく私達の宿舍から渡り廊下を通って行ける、ごく近い所に教室があった。沖繩から出発した時、持ってきた衣類は殆ど半ズボンのようなもので冬支度には不十分であった。そのため寒さには耐えられなかった。靴下などもなく冷たい廊下の行き来は裸足でもややけにかかったり、寒さの為に痛みがあったり、手は凍って麻痺し、皮膚には暗紫色の紫斑のようなものも所々に出て来た。箸も握れない程になった時もあった。凍った両手を口元に寄せて、吐く暖かい息で両手を暖めようとする姿がこちらで見られるようになった。

その頃からは沖繩の家族のことが頭に浮かんできて

「一刻も早く家に帰りたい」とそのことばかり考えていた。手紙も何度か出した。父や姉弟達から三度程度返事を貰ったが戦争は激化するばかりで遂に手紙は途絶えてきた。ホームシックは募るばかりであった。ある寒い日、私は授業中に家のことを思い出し、机に本を立て、顔を隠し、シクシク泣き出した。ふと我にかえり周囲を気にして再び姿勢を正したこともあった。

その頃大雪が降った。十二月初め頃だったと思う。真夜中で殆どの人達が熟睡している時間帯である。誰かが叫んだ「雪だ」「雪だ」その声で皆飛び起きて外に出た。川の流れ以外は一面真白い銀世界、初めて見る雪の銀世界だ。余りにすばらしいその光景に私達は興奮した。真夜中とは云え雪合戦をする者、雪の上を走り廻る者、思い思いの楽しみ方で寂しい夜を払しょくしたひとときだった。真昼のようなあの銀世界、今でも頭にこびりついている。やがて寒さも去り、いつものまにかホームシックもなくなった。共同生活にも慣れ、北郷の同級生達とも溶けこんで、その日その日の生活を過ごすことが出来るようになった。しかし、戦況の悪化は食糧調達に困難を来すようになる。炊事を担当する叔母さん達も食糧調達には大変御苦労があった筈である。毎日の食事も水の様な雑炊、竹碗の一杯づつである。それにはわずかな米や野菜、サツマイモなどが入っていただけ。しかしあの頃の私達にとって

はとても美味しい食事であった。現在ではとても考えられない食事である。戦前、豚の食事として「ンスナバーゾロゾロズーシー」のような人間の食べたあとの残飯をかき集めたようなもの以下の食事ではなかっただろうか

そのような状況下だったため、やがて多くの生徒らが村人の柿や種イモ用として地中に保存してあるサツマイモなどを失敬するようになった。

こういう悪い食糧事情、すべての生活面に事欠く状況の中でも私達疎開団からは誰一人として病気をしたり、現在云われている登校拒否という問題はなかった。陰湿ないじめもなかった。沖繩の人達は北郷の人達とのケンカも度々あったが決して負けるようなことはなかった。厳しい無い無いづくしの生活条件の中でも私達は自分自身を見失うようなことはなかった。

それは逆境で培われたプラス指向の生活態度、それは引卒責任者宇久里眞盛先生の厳しい躰、生活指導等に負うところが大きい。そして更に側面的に私達を支えてくれた料理作りの叔母さん達、北郷村の篤志家の皆様方など多くの方々に支えられて私達はこちらまで成長して来たように思う。特に私は北郷村の日高由吉御夫妻からは人間味、人間性、人間の情愛とはを教えられたような気がする。満ち足りた環境の中では体得しえないようなものである。私は幸いにも日高様の家族

の一員として同居させて貰ったことがある。夫妻の心の暖かみは今でも忘れることは出来ない。

学校で運動会があった。徒競走である。私は順位が二位であった。走っている最中に突然に僕の名前を呼びながら「頑張れ、頑張れ」と競技場内に一人で走り出て来た叔父さんの姿を見て、無我夢中になって飛び出してきたのであろうと察した時、とても嬉しく肉親以上の心のつながりを感じとることが出来た。沢山集まった大衆の前で我を忘れて競技場内に飛び出して叫び続けることは心からの愛がなければ出来るものではない。

冬の寒い日には由吉様の懐に抱かれて寝た。柔らかい肌のぬくもりと暖かさは、今でもはっきりと覚えている。

国民学校六年も修了し中学校に入学する段になると当時は大変な食糧難で寄宿舎や寮に入る場合には米なども買えない事情があつて米一升持参ということもあった。こういう時にも日高夫妻は少ない量の米から私のために寮へお米を提供してくれた。お陰で無事学校も続けられたように思う。

私は戦争の惨酷さ、悲惨さ、無意味さを知ることが出来たが一方で、日高さんのような暖かい心の持ち主にもめぐり会えて大変貴重な人生経験をしたように思う。

由吉叔父は残念なことに病気で亡くなられたがもう少し長生きして下されば、よかったのにと悔やまれてならない。往時を振り返りながら大変お世話になりましたとお礼を改めて申し上げたかった。

平成八年二月



宮崎県の北郷国民学校に疎開した本村の学童（昭和19年）

私の戦争体験記

豊見城村字豊見城六二五〇一

高良光昭（昭和九年生れ）

十・十空襲は、午前七時半頃に始まり、小学校四年生の私は丁度そのとき登校途中でした。低空の飛行機と大砲の音が聞こえた時は日本軍の演習かと思いましたが兵隊さんが「空襲、クーシュー」と言ったので私は屋敷内に縦穴を掘った簡単な壕に入り込み避難しました。

中はひざままで水が溜っていて腰を曲げたまま、ブルブルふるえていました。その後、母と一緒に整理してあった火番原の古墓に避難しました。

午後五時か六時頃、那覇方面を眺めると那覇の街と大嶺飛行場が燃えていて夕やけみたいに見えました。

空襲の後、那覇、大嶺、鏡水から多くの人が豊見城村に避難して来ました。その子ども達も一緒に第一国民学校（現、長嶺小）に通いました。学校は兵隊さんが使用していて、生徒は学校の隣の饒波馬場に集まり、饒波の拝所と高安御嶽で授業をしました。

兵隊さんが平良と長堂に陣地壕を掘っていたので、私たち四年生は作業の手伝いに行きました。男生徒は

壕の中に入り、兵隊さんが掘った土を小さいザルに入れ、手渡しながら壕の外へ出し、さらに女生徒がそのザルを同じように手渡しで捨てて行くという作業でした。作業を終えてからカンパン二個と星砂糖四個をもらいました。初めて食べるお菓子でめずらしく、とてもおいしかったです。また、そのときは国の為に、とてもいい仕事をしたとうれしく思いました。

字豊見城の集落内には、公民館や馬場周辺にガソリンの入った白いドラム缶がたくさん運ばれてきました。弾薬も木の下にたくさん置かれていました。「弾薬の近くに行ったらスパイとまちがえられて日本刀でタツキラルルよ」と私達はいつも母から注意をされました。夜になるとお腹をすかした二三人の兵隊が芋をもらいに家庭をまわっていました。運が悪い兵隊さんは、上等兵に見つかり叩かれて、メガネを落としたり朝早く探しに来ることもありました。

空襲も次第に激しくなり、米軍の上陸なども考えて、母は、子ども五人中三人（兄、私、弟）を山原に避難させることにして、一緒に山原まで送ってくれました。母の妹である、おば一家三人も一緒でした。

昭和二十年三月十六日字豊見城を出発、真玉橋駅から嘉手納まで汽車に乗り、その後は山田の学校まで歩

いてそこで一泊しました。その学校は兵隊さんが使つて出て行った直後で足の肌が見えなくらいノミがくつついて来ました。地元の婦人会が皆に配つてくれたオニギリがとてもおいしかったのを憶えています。翌朝は軍用車に乗った人達もいましたが、私たちは歩いて喜瀬の学校に行きました。泊るつもりでしたが、「危ない」との事で歩き続けて、夜、羽地の学校に着きました。ひもじい思いをしながら寝ました。

翌朝は早くから出発し、塩屋の渡し舟を乗りに行きました。途中、人が一人通れるぐらいの幅の狭い丸木橋を渡りました。足元を見ると潮の流れが早く私はたちまち目がくらんでしまいました。近くには爆撃を受けて沈んでいる貨物船もあります。それを見ながら自分達もあんなふうになるのかとこわくなりました。渡し舟に乗ってからも皆無口でいつ敵機の攻撃を受けなにか、とても不安な気持ちでいっぱいでした。大宜味村の役場に行ったら「こちらも危ない」と言われ、又、歩き続けて着いた所は喜如嘉であった。喜如嘉から一里もある当山の避難小屋に着いたのは夜中でした。その晩は落ちついて眠ることができました。母とおぼさんはその後部落に着いた自分たちの荷物を運んで来ました。翌朝は早く起きて、避難小屋の周辺を回って見たらシージャーの実があつたのでたくさん拾つて来た。そのあとで、母は私達子ども三人に「何かあつたら

必ず迎えに来るからおばさんの言うことをよく聞くように」と言い、おばに私達のことを頼んだ。そして、豊見城に残り郵便局で電話取り次ぎの仕事をしている姉と、兵隊の伝令員をしている兄と一緒に、自分はそのために頑張ると言いのこし豊見城に戻って行つた。これが母と私達との最期の別れになりました。

当山の避難小屋が爆撃された時、隣の山の中に避難していましたが爆弾が落ちると同時に私達は土をかぶっていた。その時私はアメリカの弾は土だからこわくないと思ひました。

避難小屋が燃え、山の木々に火が燃え移りパチパチと燃える音におびえ、煙に追われ焼け死にするかといふ思いをしながら私達は一生懸命逃げました。本部で育つたおぼさんの土地勘のおかげで川に添って部落に下りて行く事ができました。その時、親とはぐれた別の子ども達もついてきました。おぼさんは皆に角砂糖をあげ、勇気づけていたが、はぐれたその子どもたちの親に、よその子まで連れて行つたと、怒られたり、また別の人には助けしてくれたと感謝されたりと大変でした。

そのあと、山の中の炭焼き小屋を探して途中で一緒になつた六家族十八名で避難しました。どんな事があつてもこの十八名は一緒と決めていました。一日々と爆撃と艦砲が激しくなつて行く。十八名は朝早くから

東の方向に向かって「今日一日助けてほしい」と手を合わせる日が続きました。弾に当たったのかイノシシがうなつて逃げころがって行くのも見ました。しばらくして、そこも危ないと思ひ兵隊さんをお願いして谷底の小屋に十八名で避難しましたが、食べるものがなく、夜は部落に行つて芋を取つてきました。空腹のうゑにその頃は雨続きでその小屋もジメジメして、居ごちも大変悪く、毎日とてもきびしい状況でした。

「アメリカ兵が山に上つて行つた」とか「島尻では製糖も始まつている」等のデマが流れ、大雨の中を島尻まで道案内者と一緒に行く人の話も聞かれました。私達も平和で落ちついていけると言う島尻に戻ることを決めました。そして出発を前にお湯をわかつて体を洗おうということになりましたが、その時、ある子が誤つてお湯をかぶりやけどをしたので、少ししかないミソをくつつけて手当てをしました。やけどした子の家族を残して島尻に発つことはできないので結局十八名で残る事にしました。

そのまま、谷底の小屋にいては餓死するからと当山の避難小屋に戻り、夜は芋掘りに行き、夜明けに芋を持って帰る日が続きました。また、そてつ木を刈つてきて、水にさらしてアク抜きをし、モチみたいに炊いて食べ、飢えをしのぎました。飢えがひどくなると、

手足が膨れてくるのがわかりました。

いつも杖がわりの棒を持ち歩き、たまには、ハブやヤンバルカーミーを殺して、小屋に持ち帰り、焼いて皆で食べました。何もないのでとてもおいしかったです。

ある朝いつものように部落へ下りて芋を掘つて戻ろうとしたら、アメリカ兵が山の入り口附近を囲つて陣地になつていた。

芋掘りに行つてそこでアメリカ兵につかまつた母親達は言葉が通じないので「乳のみ児がいるからたすけてい。」とオツパイを出してお願ひしたという。

十三才になつていた兄もそのとき米兵につかまつたが、「明日までに下りて来ないと山に火をつけて燃やす」と二世の米兵が話すのを聞いて、その場からこつそりにげ出し当山の避難小屋まで知らせにきた。その夜は、「明日、山を下りてアメリカ兵の前を通る時は手を上げて、笑つて歩こう」と……心で泣いても平気な顔をしようと思ふまで話し合いました。それでも捕虜になつたら殺されると一晚中泣いていました。

朝、避難小屋を出て、山を下りる時、友軍があつた。こちの木の様子で銃をかまえて立っているのだからこわかつた。途中、年をとつて歩けないおばあさんに「一緒に連れて行つて！」と頼まれたがどうしようもなか

った。

私達は喜如嘉部落の入り口に来た時、たくさんのアメリカ兵が裸になって、バショウの木をめぐって、短剣を投げているのを見て私達もそのように短剣で殺されると思いきわくになりました。人について部落の中に行くとアメリカ兵がガムとお菓子を渡してくれたが、とても食べる気にはならなかった。

喜如嘉の民家に落ち着きました。夜、アメリカ兵がジープに乗って、部落内にアースを撒いていました。捕虜になって喜如嘉での二、三カ月は山から薪を取って来て、海から潮を汲み塩を作りました。

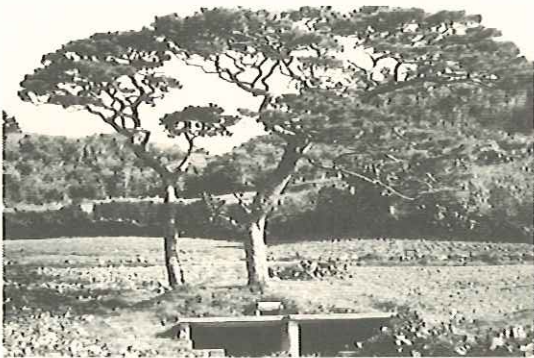
アメリカ缶詰や魚の配給があり、カンダバー、ターペーナー、シーリバーなどで飢えをしのいだ。たまには、家主のおばさんが芋を持って来て下さった。とてもありがたかった。

十月頃GMCで喜如嘉から豊見城村渡橋名部落の広場に着いた時、他の人たちには多くの親戚や知人が迎えに来ていたが、私達家族を迎えてくれる人はいなかった。割り当てられたテントは芋畑に張られ、テント一つに四世帯が生活しました。目の前のたくさんの芋を見て、食べると言うより、掘って満足しました。

壕や山などに、ミソや缶詰など食べ物を探しに行き、アメリカ兵舎から缶詰をもらってきたりで次第に食べ物に不自由しなくなりました。

その年の十二月三十一日大晦日、アメリカの大砲とサイレンが鳴りひびいたので、再び戦争が始まったかと騒いだが後で祭りとわかり、安心しました。

昭和二十年十二月三十一日で私の戦争体験記を終わります。
平成八年十一月



中・北部から帰村し、渡橋名地区に收容された村民が朝夕眺めた同字の二本松。

学生時代の青春

豊見城村字我那覇五十番地

運 天 祐 春（昭和四年生れ）

私は昭和十八年四月、豊見城第二国民学校高等科一年から沖縄県立第二中学校（俗称二中）に受験、合格をし万感溢れる気持ちで同期生諸君と共に希望に燃えて入学したものである。豊見城の同期生には甲組の故新垣辰男君、戊組の故大城盛進君と乙組の私の3名が入学したのである。

確かなことは覚えていないが、私以外あの二人は下宿通学だったはずです。私は豊見城村名嘉地から二中全会まで自転車での登下校、約七キロの道程にペダルを踏む毎日でした。現在は国道三三一号のアスファルト舗装道路ですが、当時は糸満街道と呼ばれ急な坂道など難所が幾つもあり、追い風はともかく逆風の日には自転車あまり前に進まず授業の定刻時間に間に合わずのはたやすいことではなかった。

四月入学後、一学期は皆と同様になんとか授業を受けながら経過したが、八月の夏休みに入るやこれまで苦労が一度に吹き出したのか高熱におそわれた。肋膜炎を患ってしまい二学期は三カ月も長欠してしまつたのである。三学期も間近になりこのままもう一年休

学を考え、兄（当時同校四年）に相談したところ、もう健康も回復しているようだし落ちてもよいから通学した方がよからう、と言われて今度は二中に近い山下町に兄と姉と一緒に間借りをして自炊生活。そして徒歩通学をしたのです。幸いにも姉が那覇港に駐屯していた暁部隊の経理部に就職が決まっていたので姉にはだいぶ世話になりました。

休学中に私の脳裡を去来するのは、豊見城から二中全会までの距離は徒歩通学で可能だったはずなのに、自転車通学をしたために、あのような病気になるって、と思えば残念でならなかった。

学年終末の三学期に入り、これまでの欠席の空白は私にとって肉体的、精神的に大変なショックで負担となりました。特に授業科目の英語、数学、幾何等には大分遅れ、その上、教練・体操・柔道等については休まねばならない状態となり、その時間が終わるまで片隅で見学する苦しく、つらい思いをしたものでした。

一年生をふりかえり、私にとって入学時の希望に満ちたあの気魄が、また楽しいはずの学園がどこへ消え去ったのか病欠のため無情な一年、実につらい思いが残った。

いよいよ三学期も終わり、修了式を迎えた時、予想に反して二年生に進級できることを知り非常に喜びを感じた。そのうえ担任であった屋比久先生から激励の

言葉を頂いた時は、感激の余り言葉も出ず、ただ「ありがとうございました」で終わってしまった。二年生には教練の仲地先生の担任で丁組だったと思う。

その時すでに昭和十六年十二月八日に勃発した太平洋戦争は、緒戦にハワイ真珠湾奇襲作戦に続いて南太平洋の島々へ、そして東南アジアの進出など果敢な日本軍でしたが昭和十七年以降戦況は悪化、泥沼化の様相であった。しかし国内はまだ戦勝ムードにつつまれていた。

昭和十九年二年生に進級。その年からは沖繩近海の戦況も悪い方向へととなり、一学期初めから日本軍への協力で陣地の構築に駆り出され、垣花・天久両高射砲陣地及び小禄飛行場の壕掘り作業等に従事させられた。学生として本来学ぶべきことはまったくゼロで、そのために当時のクラスの仲間たちの記憶も余り残っていない状態である。

昭和十九年の初旬頃だったと思うが、転戦中の日本軍船団が米軍潜水艦の魚雷攻撃を受け多くの兵が犠牲となり、撃沈を逃れた艦船に救助された兵隊らが二中の校舎に收容され、校舎は兵舎となり私達は野外授業を受けることになった。

一学期の中旬ごろから一部学生は本土へ疎開し、残り組の二、三年生の健康な学生は大半が学徒鉄血通信隊として石部隊に協力、入隊し、また別に一年から五

年生までは学徒鉄血勤皇隊として金武国民学校に合宿し軍へ協力することになった。

私達は、軍国教育で厳しい訓練を受け鬼畜米英撃滅を合言葉に皇国に一身を捧げる気持ちには少年といえども大きかった。「戦争は勝つ」を信じて疑わずの精神で身をかためていた。しかし青雲の志に燃えて学生諸君は大きな夢と希望を抱いて勉学に励んでいくべきだった時代なのに余りにも早すぎた戦闘参加であった。

昭和十九年十月十日の大空襲には旧那覇市内全部を含め二中の校舎も灰燼に帰した。私は体調がよくない関係で金武国民学校を拠点とする学徒鉄血勤皇隊への仲間入りとなり、別行動である通信隊の戦闘協力の状況は分かりません。昭和二十年一月上旬、私は金武国民学校へ集合せよ、との知らせを受け、先生方や上級生二十名余と共に二中に集合し金武へ向け出発した。

途中、はからずも名護行き軍のトラックに遭い、先生方が事の次第を打ちあげ恩納村屋富祖まで乗せてもらった。そこから山道をたどって約一時間半で目的地の金武国民学校につき一息いれた時は午後四時頃だった。暫くすると当地には配属将校や教練その他の先生方も一緒に学生が五十名位集まっていたと思う。記憶は薄れたが私達の日課は木材の切り出しや教練の時間が主なものだった。一月といえば真冬だが毎日朝夕は並里の大川まで行き、洗面、水浴び、洗濯等をした

ことが強く印象に残っております。また同校には海軍特殊魚雷艇部隊（予科練卒）も同じく陣どつていた。

二月頃、同魚雷艇が友軍機の護衛のないままの金武湾での演習中、米軍のB-24型機の低空機銃掃射で何名かの戦死者が出た。それを見せつけられたとき制空権も制海権も米軍に握られたなあと半ば感じていた。学童疎開者の犠牲者が多かったころである。

三月中旬早くも二カ月経過した頃、戦雲は急をうつけ十八歳未満の未成年者の戦闘協力には保護者の承認が必要なこと、と家族への面会も兼ねて一週間の休暇を与えられて帰宅した。

ところで三月一日の現地初年兵の入隊の日、敵機の大空襲があり、その後も毎日のようにB-29が一万米上空で銀翼を輝かせ飛行機雲が長く尾を引くのが見られた。いつまた大空襲があるのかと、戦々恐々でしたが、ついに沖縄県民の運命の日がやってきた。

三月二十三日、米軍機動部隊は本島へ向けて続々と押し寄せ、もう上陸は必至であった。その日から敵機の機銃掃射や艦砲射撃など、米軍の一大攻撃が始まり避難民は衣食など担げるだけのものを担ぎ右往左往する。守勢に立つ日本軍は馬車や荷車で軍需品の運搬あるいは集団による兵隊の移動など、慌ただしく動き大変な事態であった。私はとうとう金武へ行けず家族と共に避難壕での生活が続きましました。

戦闘は日増しに激しくなり、とうとう四月一日には嘉手納方面から米軍が上陸し、空爆、艦砲射撃、迫撃砲等が一寸の余地もないほど撃ち込まれた。

四月中旬になると、動ける者は老いも若きも軍に協力せよ、と警察官と軍人が各壕に呼びかけ、私も周囲の村人たちと一緒に軍の移動のための糧秣や弾薬運搬等に加わった。

夜七時ごろ豊見城城址の壕を出発し、その日は南部真壁地域への行程であった。途中、突然迫撃砲の攻撃にあい、私は腹部に長さ十センチ程の破片による傷を受けた。一瞬の出来事だった。大声を出し、知人に助けを求め、近くの山部隊の壕に行き衛生兵の手当を受けた。その時も壕の入り口に差しかかった瞬間、艦砲の至近弾を十メートル内外に二発受けたが、九死に一生を得た。そしておよそ二週間分の薬とガーゼ、包帯をもらって友人と共に自分の壕に戻った。あの時、民間人多数が死亡しました。それ以来砲爆の至近弾が激しく、壕内での生活を余儀なくされた。戦闘は悪化するばかりで、豊見城村も危険となり、とうとう六月十五日私たちは南部の喜屋武を目指して避難することに。隣り近所十七名でした。

その時、糸満や豊見城村には既に米軍が進攻する気配があり、南部喜屋武への脱出は一晚では不可能でした。兼城の報得川に架けられていた橋は日本軍の手に

よって破壊されていて、その川を渡るのに相当の苦勞でした。さしあたり伊敷の集落に着いたが、その間にはたたくさんの死体が道の上にもころがりこんでいて、私達は七十五歳のおばあさんや小さい子供達も一緒にしたので、死体を踏まずに避けながらの道程は言葉で表せないほどの行動でした。伊敷集落に着いたものの身を隠す壕はどこにも見当たらず、やむなく十六日の昼中は大きなガジュマルの木の下に身を隠した。夜を待つ間にたちまちこの付近一帯は何処からともなく避難民が押し寄せ、人ごみに迷わないように私達はグループの名前を大きな声で呼び合いました。それは私達十七名の無事を確認するためでもありました。その時突然一人の兵士が姉の名前を呼んで近づいてきた。姉は以前曉部隊の経理部で働いていたことがあるので、つきりその時の知り合いの兵士が避難場所でも教えてくれるものだと思つた。期待感を抱きつつ近寄るその兵士をよく見てみると、思いもよらぬ偶然にもそれは三月一日に入隊した兄（祐友）であった。

お互いに無事を喜んだのも束の間で、軍国教育を受け軍律にそむかない兄は、軍服姿のまま家族との別離を惜しみつつ日米混戦状態の非常に危険な宵闇にと消えて行きました。

夜中打ち上げられる照明弾のなかを、私達は逃げ隠れしながらようやく落ち着いた所が傾斜の削りとられ

た錆壺壕でした。上は木の葉で偽装されていたが一発でも食らえばおしまいだが、他に避難場所がない。仕方なくそこへ身を隠した。

ところが一坪ほどの場所に十七名でひしめき合い熱気はむんむんし、飲み水とてない。七十五歳の老人と幼児五名を抱えその世話に四苦八苦でした。暑さと水ほしさに子供らは泣きじやくり、親たちは手で子供の口をふさぐのに死に物狂いであった。

十七日午前三時頃、若い十八歳位の女性が焼夷弾に焼かれ私達の所に飛び込むように助けを求めてきた。

そのとたん米軍の歩哨兵に見つかり、手榴弾五発を投げ込まれ四名の犠牲者が出てしまった。私達はこれで最期だと覚悟を決め、日本軍から貰った二発の手榴弾の信管を抜き、地面に叩きつけた。しかし爆発しない。それならばと今度はマツチ棒をこすり、姉たち三名で必死に手榴弾の底のほうをあぶったが駄目。もう一発も同じように繰り返したが不発に終わった。朝五時半頃、東の空はもう白み始めていた。不幸中の幸いというか、私達が死を決しての手榴弾は信管を叩いてなくその反対側を叩いていたため不発になっていたのである。まさに偶然の出来事であった。地面に伏している間、米軍が壕の上から偽装網を取り払い民間人だと分かる。「出て来い、カムヒヤ」の連発で銃を突き付け私達は投降した。

「運命は神のみぞ知る」私達は捕虜となり、助かったのである。ただその時は死んでしまった人達に申し訳なく、静かな浄仏を祈るのみであった。後になって知ることとなるのだが、豊見城名嘉地の私達の周辺にあつた壕にそのまま残つた方々（三世帯、二十名程）はすべて死亡されたとのこと。そのことを思うと、私達がとつた南部避難の行動もまた偶然の出来事だつたとはいへ、運命というものを感じざるを得ません。

米兵に発見され手榴弾を投げ込まれた際、一緒にいた三歳の女の子が肩の半分程をやられ大怪我をした。同じ兄弟もその時被弾により三人が亡くなつた。その母親もそのショックで放心状態である。これから捕虜になり、どのように殺されるのか分からない。せめて兄弟の遺骸とともに最期を送らせてあげようという気持ちがあつたのかも知れない。私達は泣く事すらできぬその子を死ぬものとあきらめて、そのまま壕を出た。すると五十メートル位歩いた時、後方から米兵がこの子を抱いて私達のところに連れてきた。その子も今では三名の親となつて元気である。

去る大戦で不幸にして還らぬ人となつた同期生や兄を含めたくさんの人々の御霊が本島南部の地に鎮まつている、と想うにつけ悲しみに堪えない。しかし、半世紀が経つた今日、子や孫たちが平和に暮らせるよう

見守つていてるかと思うと心の安らぐのを覚える。

平成八年九月



米軍監視のもとで収容所生活をおくる住民ら
撮影場所は北部か？月日不詳

(字上田 大城見教氏提供)

沖繩戦 十七才の防召兵

豊見城村字保栄茂二四

當銘保一（昭和二年生れ）

防衛召集

昭和十九年十月十日、空母七隻を含む八十五隻の艦船からなる米海軍機動部隊から発進した艦載機約九〇〇機が沖繩本島に午前七時頃から夕方までにかけて五波にわたって初めて来襲し、飛行場や港湾施設等に甚大な被害を与え、那覇市にも焼夷弾の雨をふらせ県都は一日で廃虚と化し、軍民に一五〇〇人余の死傷者を出した。その忌まわしい十・十空襲をすぎ昭和二十年と年が改まった沖繩は、新年早々から空襲やB―二九等による超高空からの偵察飛行が頻繁に行われ、戦局は緊迫した状況になっていた。武部隊（第九師団）の台湾移駐によって生じた防備の空白を埋めるためか、牛島第三二軍司令部は緊急事態に対処すべく十六歳以上の男子の根こそぎ動員に踏みきり、二月と三月の二回に分けてすべての男子を兵役につかせた。

南部地方の第一陣は二月十八日、首里・那覇以南の本島南部町村から召集された者が東風平の明治記念運動場に集められ、そこから各地に駐屯する部隊に配置

された。わたし達球兵站部隊に配属されたのは、首里・那覇・真和志・小禄・豊見城・南風原の防召兵（注・防衛隊）で、友寄隊と称し、その駐屯地は、安里の県立第一高等女学校である。保栄茂出身は當銘龜次（四男百次）、當銘保助（仲又百次）、當間清助（前内門）新垣龜助（新金城）、當銘盛昌（門才順）、當銘保一（大百次）と、後に挽馬隊に配属された當銘尊一（大上）であった。

大島隊に配属さる

入隊して一ヶ月以上もすぎた三月二十三日、朝飯の片付けもまだ終わっていない。突然空襲警報のサイレンがけたたましく鳴る。それと殆ど同時に首里の丘をかすめ艦爆のカーチスが急降下で襲いかかる。一高女は十・十空襲後那覇近郊に残った数少ない大きな建物であり、度重なる偵察飛行によって兵營である事が察知されているらしく執抑に攻撃をくり返す。那覇港に停泊中の船舶も必死に煙幕を張っている。今までの空襲のように波状攻撃ではない、間断なくそれが三日も四日も続いている。いよいよ上陸は必至である。

一高女を追われた友寄隊は、各地に駐屯する部隊に分散配置されて、同郷の新垣龜助と當銘龜次は他隊に編成替になり、その外の者は南風原村山川に駐屯する独立自動車第二五九中隊（別称・大島隊）に三月二十

七日配属された。港川方面にはすでに艦砲射撃がはじまり、日を追うごとに激しさを増して来ている。しかし、それが日本軍をけん制する米軍の揚動作戦であるとはつゆ知らず、守備軍が兵力を南部に集結させたその隙を突いて四月一日、中部西海岸から無血上陸をし、翌二日沖繩本島は南北に分断され、島尻地方に展開していた守備軍が態勢をたて直し、嘉数・我如古の線に布陣するまでに一週間を要した。

四月二十五日、我が大島隊は一部の兵を根拠地の山川に残し、前線に出動した砲兵隊陣地の守備についた。そこは具志頭集落後方の山々で敵の港川上陸に備えて構築された陣地である。すべての陣地は山を貫き海に面し、その中間あたりに兵士達の休息所と弾薬置場があり、更に進むと広い砲座がある。その前づらには擬装網が張られ、壁面には大きな絵図板があり、前方に広がる視界内の目ぼしい地点の絵図とその距離が克明に記されている。しかし、この一発必中敵の水際撃退をもくろんだ堅固な要塞も背後から敵を迎えた今その機能を失い、ありし日のつわもの共の夢の跡は戦略上不要になり隊は根拠地の山川に引きあげる事になった。

五月二十一日、引きあげの準備を整え外に出ると、日がとつくに暮れた梅雨空の雲の切れ目から十一夜位の月が侘びしげな光を投げている。隣の陣地から「梯梧の花の咲く頃は真赤な日陰で子守唄」と、あのかなつ

かしい沖繩育ちの唄がきこえてくる。こちらでも車座になつて座つていた幾人かの防召兵が小さな声で歌いだした。「朝はそよ風日の出頃・汗にまみれて鏃をふる」と、殺りく地獄の戦場で久しぶりに歌う故里の唄にすぎし平和な昔を思い出し、誰もが目頭の熱くなるのをおさえる事は出来なかつた。

間もなくして隊は山川に向け出發した。しかし、防召兵の中で年の若い十数人の者は、爆雷運搬班として本隊より数十メートルの間隔を保つよう厳しく命じられていた。鉄兜と飯ごうを除けば正規の兵達と全く同じ装備である。その上に更に十数キログラム以上もある急造爆雷を背負わされた十七・八才の若僧達は、その重量にとうてい耐えきれない極限状態であり、加えて昼間の雨で具志頭から新城に通ずる里道は泥沼と化し、それに足をとられながら淡い月明りを頼りの強行軍はまさに死の行進そのもので、誰一人口をきく元氣もなく、自分達が今どこまで来ているかさえ分からな

いあり様でたつた。

突然数発の砲弾が続げざまに飛んで来た。指揮者の兵が伏せつ、伏せつとしきりに叫ぶ、しかし誰一人伏す者はいない。背中に爆雷を背負つた泥んこ道で、伏したが最後自力では到底立ちあがれない。——辛い、とても辛い泣いてその苦痛が癒えるなら泣きたい位であつた。その時、ふと私の脳裏をよぎつたのは二年前、

病で逝った同郷の同級生栄三君の面影である。お先まつ暗、勝ちめのない戦場であの様な苦しみに出くわしてみると、人の子として生まれ、人間らしく死んでいった彼があまりにも羨まれてならず、思わず「栄三：ヤアヤ・リカシャー」と独り言をつぶやいていた。隊はもう東風平をすぎているらしい、先発の本隊は爆雷班を待つていたらしく私共があえぎあえぎ到着するとすぐまた動きだした、何時もの間隔をおいたままで。彼等にとつて防召兵は消耗品でしかなかった。

首里戦線へ

五月二十三日、中隊に出動命令が下った。昼間の激しい砲爆撃の音も止み、何時もの様に静かな時間帯である。しかし、上空にはまだトンボが飛んでいる。トンボとは米軍の小型偵察機スチンソンL5の事で、その形が軽快で戦線上空を身軽に飛行する事でトンボと呼ばれていた。このトンボは海上の艦船や、砲兵隊陣地と絶えず連絡をとり、着弾の様子を知らせたり誘導したりして常に目の役目を果たしていた。これが上空を旋回すると必ず砲撃を誘うので、最も恐れられた飛行機である。二〇〇人を超す部隊の移動は危険を伴うので十五人一組の数メートル間隔をおいての分隊単位の移動であった。軍靴と帯剣には敵の電波を避けるため藁縄を巻つけ、背中にはカムフラージュの木の枝

を差し、誰一人口を利く者もなく、夢遊病者のように唯とぼとぼと歩く死出の旅への出陣であった。我が中隊はきわめて軽装備で与えられた兵器は小銃と手榴弾二個づつであり、防召兵には鉄かぶとさえも支給されず、行く道々路上に倒れた兵のを借りる有り様であった。

兼城の十字路をすぎ、国場川に架かる橋の上から目をおとせば昼間の大雨で水かさを増した川面には、軍服姿の兵士の死体が濁流に流れ、岸辺に横たわる兵の腐乱死体に、飼い主のない野生化した豚の群がる様を見た時、戦争と言うものの愚かさ、人の世の儚さ、無力さをしみじみと思ひしらされた。そこからしばらく行った所で私は地獄で仏に会った様な思いをした。行くての右傍ら土手を背にして座ったまゝの姿の仏様である。やつと手に入れる事ができた鉄兜のひもに手をやりながら「兵隊さん、見守って下さい」と心の中でつぶやきながら借用した。それは星ふたつのまだ若い兵士であった。

焼け果てた首里の市街地に全中隊が集結したのは、夜の九時頃である。米軍は目と鼻の先の石嶺近くまで来ているという。我が隊は戦闘経験のない後方支援部隊である事も手伝って、敵前をも忘れ各分隊が陣地の配置や人員の確認等で兵達がざわめいた、それを敵に探知され猛烈な迫撃砲の洗礼を受け、到着したばかり

の中隊は五十人余の死傷者をだし、防召兵の殆どが後方への患者輸送のため戦列をはなれ、我が第一小隊の第二分隊も防召兵は自分一人の十一人となった。配置された陣地は右斜め前方に弁が岳をのぞみ、左後方には碎石場まがいに破壊しつくされた首里城が見える赤田・鳥堀のあたりである。焼き払われた市街地は遮蔽物ひとつなく、おまけに標高一六〇メートル余の弁が岳には敵が出没し、身動きも出来ない状態であった。

あてがわれた陣地は、陣地とは名ばかりの、焼けっ原のあちこちに残った石垣を利用し、燃え残りの木切れ板切れを並べて、その上に焼け石をばらまいてカムフラージュしただけのものであり、その中で十人余りがひしめき日中は一步も外に出られない生き地獄であった。また、分隊編成が頻繁に行われ、名も知らない兵が多く、何かと不自由であった。が、我が分隊の西側三十メートルと離れない所に當銘保助の分隊があり、同郷の者として心強い限りであった。

肉迫攻撃隊を命ぜられる

暗雲が低く垂れ込んだ梅雨空は、今にもくずれそうな五月二十四日の朝である。空には絶えず偵察機が旋回し、前田・石嶺の辺りからは銃声が聞こえてくる。正午頃、分隊長から戦況についての説明があった。それによると「米軍は、西は仲井間・上間のあたりまで

迫り、東は与那原まで進出し、首里陣地の包圍網は日増しに狭められており、よって我が軍は二十七日の海軍記念日を期して総攻撃を敢行する。特に各小隊の第二分隊からはそれぞれ二名ずつ出して肉攻班を編成する事になっており、本分隊は館林一等兵と當銘二等兵にこれを命ず」と言いわたされた。

肉攻班とは肉迫攻撃隊の事で、十数キログラム以上の蛸壺や物陰に身を潜め、敵戦車が近づけば飛び出して爆雷もろ共体当たりする陸の特攻隊のことである。しかし、分隊長の話に館林一等兵は動ずる気配もない、正直言つて自分自身も、まだ年端もいかないうちの沙汰もあつてか、何てこともなかった。平和になった今、死ぬ事が怖くなったと言え、當時を知らない後輩達や、或は外地の野戦帰りの先輩達は、まさか生身の人間がと、理解に苦しむかも知らない。

しかし、じわりじわりと追いつめられて逃げ場をなくし、窮鼠猫を咬むのとえで、人間が人間本来の心を失い、死を恐れなくなつたのが沖繩戦に於けるウチナーンツだったのである。外地の戦場で戦つた先輩達は、命を大事にして生きながらえておれば、何時かは帰れる故里もあれば、帰りを待ちわびる妻子や親兄弟もおり、それ等の肉親の上に思いを馳せ生きる望みをつなぐ事も出来たはずである。

ところが郷土が戦いの場となった沖縄では、帰る故里も肉親も前線銃後の区別のない米軍の無差別攻撃によつて、我々の祖先が幾世代をかけて築きあげたすべての物は破壊しつくされ、敗戦の色は日増しに濃くなり、加えて頼みとする軍から伝わる情報は、捕虜となれば婦女子は米軍の辱めを受け、男は皆戦車の下敷きにされると宣伝され、人々は生きる望みを失い「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪科の汚名を後の世に残すことなかれ」とする戦陣訓の教えもあつて、自暴自棄、死を恐れない、唯自分自身が何時何処でどの様な死にざまをするかだけを考えるのが精いっぱいになつていた。

分隊潰滅状態に

東の空が白みはじまると、各地に分散任務についていた兵が皆帰つて来た。前線ではじめての米の御飯に皆が童心にかえり喜んでゐる五月二十五日の朝である。久方の銀飯で満足感に満ち食事の後はしばしまどろむ時間である。眠るといっても横になれるスペースはない、奥行き約三メートル、幅一、五メートル位の広さで上をカムフラージュしただけの壕の中は、両側に幅三〇センチ位の板を並べ、それに腰をかけたまゝ壁にもたれての仮眠である。分隊の座席は、奥まった比較的安全な所が部隊長席で、防召兵の自分の席は言わず

と知れた空から丸見えの入口の所であり、その右隣が具志頭守備以来同じ分隊の戦友館林一等兵の席で、分隊長から自分までの六人は北向きに、残り五人は南向きに席がきめられていた。

その日の朝、どうしても寝つかれない。一昨晩負傷兵の担架輸送で後方に行つた兵達は一人もまだ帰つて来ていない。輸送中に何かが起きたのではないだろうか？それともあの激しい砲撃で出鼻を挫かれまだ震えあがつているのだろうか？帰らん戦友達の事が気にかかる。

しかし、何時の間にかうたた寝をしていた。と、突然大きな耳をつんざく様な砲弾の炸烈音に目を覚ますと壕内は硝煙が立ちこめ、阿鼻叫喚と言うか此の世の地獄絵が眼前にひろげられていた。分隊長をはじめ四人が即死、五人が傷を負うている。館林一等兵を除く四人の負傷兵は硝煙の中を衛生兵・衛生兵と大きくわめきながら壕をとび出して行つた。しかしその後彼等を二度と見る事はなかった。その時、自分の真向かいで座つたままの姿で成仏していた尾野一等兵の時計は午前九時半を回っていた。上空には絶えずトンボが旋回しており、壕をとび出した兵達が発見されたらしく、又々迫撃砲集中砲火を浴び、各隊とも相当痛めつけられてゐる模様である。今朝方、銀飯を仲良く分けあつた十一人の戦友が一発の砲弾でこのざまであり、無傷

は自分と名も知らん上等兵の二人だけであつた。しかし、その上等兵も何時しか行方が分からなくなつていた。

館林一等兵の傷は、右大腿部に破片が突きささつており相当深い様である。太股をきつく縛りつけて一応の止血はしてあげたもののどうしても完全には止まらない。神経が麻痺してか痛む様子もない。しかしそのままに放つてもおけないので衛生兵を呼びに行こうと幾度したが彼は許さず「當銘君、自分一人になつてもう怖くなつてきたのか……は戰場なんだ、僕はこれしきの傷ではひるまないから、もし今度落ちたら死なば共だよな」と、私にもたれかかる様にして抱きついていた。

その日は前の日とはうつて変わり、何だか朝から荒模様であつた。銃声も段々近づいて来ているのがよく分かる。午前十一時すぎである。頭上では榴散弾がぼんぼんと炸裂し破片の雨を降らせている。完全な壕のない前線で一番怖い砲弾である。負傷した館林一等兵は私に寄り添つたまま身を縮めていた。その時である、突然彼の巨体が大きな呻き声と共に私の足もとにどつと崩れた。又々彼は被弾したのである。今度は左膝関節の上から貫通した破片は軍靴もろ共には踵をも切斷してしまつた。傷は重い、もう座る事も出来ない、腹這つたままである。一応の止血はしてあげたものの多量

の出血でその顔にはもう生氣はない、衛生兵も来てくれない、しかし彼は愚痴ひとつこぼさない。

人の運命つて不思議である、肩を寄せあい、彼の左足と自分の右足はびつたりとくつついていた、たった数センチの差が二人の運命を大きく変えた。この続けざまに起きた二度の砲撃から自分は生きのびたのである。これは唯事ではない、奇跡の出来事とも片付けられない。その時私は齢に似合わず急に信心深くなり、思わず南西の方角故里に向かつて生まれて初めて心から両手を合わせていた。この神仏の加護としか言い様のない出来事は三〇メートルと離れていない隣の部隊でも話題になり、間もなく部隊中に知られていた。

館林一等兵が致命傷を受けてから六時間以上も経つた午後五時半頃であつた。彼に言われるままにポケットから手帳を取り出して渡した、中には写真が入っている、兄と妹の写真である。中国揚子江の沿岸で砲艦に乗り込んでいると言う兄の写真を手はその名を呼びながら「俊治はここまで来たが、一発の弾も撃たずに此のざまだ、必ず僕の分までも頑張ってくれ」とたのみ、昭和三年生と言う妹は宝塚の舞踊団にいるらしく彼に似て背のすらつとした如何にも舞踊家の卵らしい少女であつた。その妹には「兄達の分までもしつかりと孝養をつくすよう」しきりに頼んでおり、両親に今までの自分の放漫の生き方と、先だつ身の不幸を詫び

るその眼差しは痛ましい限りであった。

やがて夕闇も迫り、空にはトンボの姿も見えない時刻になつていた。指揮班から四人の兵隊がやつて来て、傍で付添つていた私に「御苦労」と声をかけ、更に「隊は今晩移動する、装具は全部まとめておけ」と指示した。彼の身体は衰弱しているが、意識はまだはっきりしていた。しかし、指揮班から来た兵長が「どうせ助からん命、許してくれ」と呟きながら彼が目を閉じた隙にこめかみにピストルをあてた。彼、館林俊治一等兵は奈良県宇治郡五條町の生れであつた。(中隊は潰滅的打撃を受け、二十七日の作戦は中止された。)

最前線へ配備

悪夢のような一日もやつと暮れ、雲の切れ間から満月が時々顔を出していた。第二部隊唯一人の生き残りの自分は隣に陣取つていた分隊に合流し、他の残存兵士等と共に同日深夜南風原村の大名に退き、更に翌二十七日未明新川集落へと移動した。新川には前任の山部隊の兵士達があり、その士気と言うか木の荒い事は球部隊の比ではなく、その日は珍しく何時ものトンボと違い空には水上飛行艇が低空で旋回していた。後続部隊への見せ場をつくろうとしたのか、新旧守備隊が入り混んだ集落内のあき地上半身裸になつた三人の兵士が、機関砲を持ち出して撃ちまくる様は勇敢と言

うより無謀にもみえた。発見されたが最後身を隠す壕もない両部隊は全巻の終であつた。しかし彼等は何と言つても勇者である。斬り込みに行つたと見せびらかす戦利品は、まだ見た事のないビスケットと、アメリカ製煙草、日の丸印のあのラッキーであつた。彼等はその日の夜南部に撤退し、交替した我が隊は夜明け前、与那原町の大見武へと前進した。その残存兵力は定かでないが、百人を大きく割っている様である。あてがはれた分隊の守備陣地は集落内の小高い森に構築された壕で首里の陣地に比べ堅固な要塞そのものであつた。早速あてがはれた任務は、その陣地壕周辺の蛸壺からの監視であり、すぐ任務についた。しかし任務につくと同時に監固な要塞の安堵感も吹つとんでしまつた。そこで見たものは、夜目にもはつきりとすぐ目の前は敵陣である。その米軍陣地で時々軍用犬が吠える、照明弾がうち上げられる、その光に照らし出されたのは集結した紛れもない米軍車輛である。やがて東の空がかすかに明るくなつた、目の前のすぐそこは焼け果てた与那原の町であり、中城湾には多数の艦船がひしめいている。話には聞いてたが目のあたりに敵の物量と言うか戦力を見せつけられるともう次の言葉は出てこない。——時刻は正午をすぎている、下番して来る兵達は皆沈痛な表情である。幸い敵はまだ此方に氣付いていない。時が経ち今日もやがて暮れようとする

と、兵達の顔に明るさが戻ってきた、帰る故里のある彼等は地獄の戦場でやっと一日生きのびた安堵感からである。

夜明け前の撤収

五月二十八日、日中久々に晴れあがっていた天気は夜になるとまた降り出した。米軍陣地からの犬の遠吠え以外物音一つ聞こえない静かで不気味な最前線の夜である。午前3時頃であった、指揮班から各分隊陣地に伝令がとんだ「即時全員撤退せよ」とである。降りしきる雨の中を昨夜来た道を西に進む。大名をすぎると首里から退く兵や負傷者が後を断たない。大粒の雨で小川のようになり健常者でもままならん弾痕だらけの道を戦友の肩を頼りに南下する兵、重傷のあまり青酸カリを配られながらも何とか生き伸びようと、兵隊さん・兵隊さんと手をさし出してしきりに助けを求めつつ腹這いながら必死に南を目ざす重傷兵達の痛ましい姿、これがかつて、電光石火破竹の勢いで南方の島々を席卷し、広くアジアの人々を震撼せしめ、国内では無敵皇軍と謳歌された日本軍の変わり果てた姿であり、映画でも描写出来ないはずのあの地獄の修羅場は敗戦の戦場を身をもって体験した人のみの知る筆舌に尽くし難い悲惨な光景であった。それは昭和二十年五月二十九日午前五時頃のことである。

そこからしばらく南下して今の沖縄県公文書館の辺りまで来ると先に発っていた兵達が道端にたむろしている。聞けば本隊はその日これ以上の南下は許されていないと言い、近くに適当な陣地壕があり、そこで待機することにした。正午頃であった、近くを南下する他隊の兵が、今朝首里城が適の手に陥ちた事を知らせ、西は識名辺りまで来ていると言う。東はすでに大見武をすぎ宮城の集落で今激しい撃ち合いが行われ、我方の重機関銃がしきりに唸り応戦しているが、発煙筒がたかれているのが此方からもはつきりと見える。刻々と我が隊も馬蹄形に包囲されつつある。その日は何時にも増して長い一日である様な気がした。時計の針は遅々としてすすまず、空にはトンボがしきりに旋回し増々不安をかきたてられ、皆気が気でない様子である。

そうこうしているうちに、やがて日も大分傾き、どうやら最悪の事態は避けられそうな時刻になった。こちらから仕掛けない限り彼等は日本軍と違いオーバータイムは滅多にしない。五時をすぎると砲兵隊の一部が予め照準設定された陣地や主要道路の交差点等に盲撃ちに大砲を撃ち込むだけである。我が隊が間もなく通る南風原交差点も人々に最も恐れられた死の十字路のひとつである。

すでにトンボの姿もなくなった午後六時頃である。

みんな草や木の枝で擬装し、道路上をさけ側溝や土手伝いに、一人またひとり数メートルをおいての脱出であった。中隊が根拠地の山川陣地に撤退を完了したのは夜も大分深くなっており、生存者は患者輸送に出たまま生死不明の隊員を除けば七十人を割り込み、五月二十三日以来一週間の前線出動で全兵力の四分ノ三近くが、戦列から消えたのである。

山川陣地から眺める一夜明けた三十日朝の首里の山並みは硝煙もおさまり、昨日までの出来事が嘘の様に静まりかえっている。多分アメ公達は首里城を完全に包囲し、意気揚々とやって来たもののそこはすっきりも抜けの殻、中からは鼠一匹出てこない、狐にでもつまされた様に今頃は気落ちしているのだろうか？、それとも戦勝の祝杯に束の間の休息を楽しんでいるのだろうか？戦場とも思えない静かな朝である。

その頃、第三十二軍司令部はすでに摩文仁に移っており、我が残存部隊にも次の守備陣地と座岳に撤収せよとの命が下っていた。しかしそれは、今までの中部戦線での寸土を争う争奪戦からは思いもよらない大幅な後退であった。

聞くところによれば我が中隊の一週間の前線配備は、第三十二軍司令部と、石・山両師団の精鋭部隊の撤収を助けるための適の目を欺く罫であったと言われている。その事を聞くにつけ、硝煙けぶる首里の丘で捨て

石となり、空しく命をおとした多くの戦友達の最期があまりにも痛ましい。

与座岳に撤退

八重瀬岳から与座岳・国吉へと連なる丘陵地帯は、周りの平地より数十メートルも高い天然の防壁で、守備軍はこの洞窟陣地で地の利を生かした劣勢の挽回を試みていた。五月三十日夕方、我が隊は山川陣地を放棄全員が持てるだけの食糧を持ち与座岳に後退した。翌三十一日、山川がまだ安全であると言う事で同日夕刻私を含む防召兵四人が食糧搬出の使役を命じられた。山川に向い志多伯あたりにさしかかった時、今出てきた夕闇迫る和座岳は艦砲の集中砲火を浴びている。東風平をすぎ宜次近くの掘割りは多数の兵士の死体で一杯である。

無人となった山川の壕には持久戦に備えて貯えられた米がまだ山程残っている。それぞれが担げるだけ担ぎ、至近弾に何度も苦しめられながら、ようやく辿りついた深夜の和座岳にはもう誰もいない。隊は又々何処かに移動したのである。こうして置き去りにされたのは首里出身の年輩の人二人と、那覇は泊で製塩業を営んでいたと言う昭和二年生れ、自分と同じ年の平安山良英の四人であった。やがて夜も白々と明け、手分けして附近一帯を捜したが手掛かりはない。

前の日の日中隠れていた岩陰や木の下に、所々新しく掘り返されているのは多分埋葬した跡である。時が経ち日が昇るにつれて砲爆撃は激しさを増してきている。トンボが執拗に飛び交い、敵はあきらかに此の八重瀬連峰に攻撃の照準を合わせている。本隊を捜しまわっているうちに四人とも何時の間にかはぐれてしまった。捜しあぐね岩陰の蛸壺に入っていると、いつしか昨夜からの疲れに眠ってしまい、気がついた時には日も大分西にかたむいていた。

隊にはぐれ、なすことも、することも何ひとつない。万事休すである。はじめて自分一人になると故里の事が気にかゝる。保栄茂は今頃いったいどうなっているだろうか、四月二十日以来帰った事も家族の安否を聞いた事もない。隊にはぐれ自由な身(?)になり、故里の事を出すと急に帰心矢の如く、焼け残りの砂糖のくすぶる高嶺工場の紫煙を横目に、足は何時しか北に向かっていた。座波に抜け、阿波根をすぎ一里毛から望む故里は、かつての平和で活気に充ちていた面影は偲ぶよすがもなく荒涼として寂寥感が漂っていた。集落内に足を入れると殆どの家が焼き払われ、人々はすでに避難したらしく人影もない。何を目標にしたのか門殿内(七十二番地)や下ム門(六十五番地)にはとてつもない大型爆弾の弾痕が大きな口をあけている。

焼け残った大嶺家(二十五番地)には十三人の海軍陸戦隊の兵士達が投宿しており、彼等が言うには米軍の南下を阻むため昨夜は真玉橋の戦術爆破を行い、今夜は高安橋に向かうとその準備に余念がない。

その昔、時の国王尚真に国場川への架橋を請うて許され、西暦一五二二年はじめて木橋を架けたのが大嶺家の祖先大嶺親雲上忠雄(伊隆徳)である。そして四〇〇年以上も経った今、その大嶺家を根城にした兵士達の手によって、人身御供・七色元結の伝説を秘め沖繩の金帯橋と言われた国宝級の名橋真玉橋は爆破されたのである。その事は偶然の一致であるにしても、何と不思議な歴史の巡りあわせだろうか。

明けて六月二日午後二時頃、集落の内外に数発の爆弾が投下され、その硝煙もおさまらん中を米軍は、親川原あたりからグスククシヌモー・ウフギシと峰伝いに進攻し、日本軍の組織的抵抗もなく、またたく間に翁長・阿波根も占領され、六月二十一日の昼下がりに南の果て喜屋武岬の海岸で捕らわれるまで、それこそ生と死の淵をさまよう毎日であった。

むすび

思えば昭和二〇年三月二十三日、米海軍機動部隊の大空襲によって戦端を開いた沖繩戦は国内唯一の地上戦になり、非戦闘員をも巻き込んだ鉄の暴風は三ヶ月

にわたって吹き荒れ、史上例を見ない地獄絵図が県内いたる所で展開され、日米双方で二十万人余、我が豊見城からも三千七百九十二人の尊い命を奪ってようやく終結した。

戦い終って五十一年、昔の王侯貴族の暮らしを思わせる、すべてが満ちたりた時代を迎え、かつて支那事変勃発以来、長く苦しい戦時体制下、祖国の勝利をひたすらに信じ、米英撃滅のスローガンのもと、「月々火水木金々」「この手緩めば戦力鈍る」と、国民総動員法の名のもとに駆り出され、「進め一億火の玉だ」「欲しがりません勝つまでは」と、耐乏生活を強要され、「見ない・聞かない・言わない」とすべての人権が抑圧され、生きた死屍同然の暗黒の世界から這い上がる事も出来ないまま、あたら命をおとした多くの人々が、今となつてはあまりにも不びんに思われてならず、ひたすらにその御魂が安らかに鎮まり、この平和、この豊かさイチイチマリと祈りつつ筆をおく。

一九九六年



米戦車を先頭に護岸づたいに避難誘導される住民
前方に見えるのは瀬長島（昭和20年6月16日）

「大城盛昌日記」について



大城盛昌氏
(1882~1973)

「大城盛昌日記」は本村の名誉村民第一号（昭和四十年推挙）である故大城盛昌氏（字上田出身）が終戦間もない昭和二十一年一月から書き綴った個人日記である。

氏は明治十五（一八八二）年に当時の字喜久嶺二三番地、屋号新門小に出生。早くから医を志し、沖繩県立病院付属医学生教習所を経て東京の日本医学校に入學、在学中の同四十年に医術開業試験に合格した。

卒業後しばらく赤坂にあった開業医の助手として、医療現場の実地経験を積んだのち、同四十四年には東京帝国大学付属外科研究生となり、その翌年六月に帰郷。大正二年に自宅で医院を開業し、戦前から戦後に

かけて地域医療に多大な貢献をした。戦前は県会議員二期、村産業組合長を昭和六年から十九年まで務め、さらに戦後も医療活動と併せて引き続き初代の農業組合長を歴任するなど、医療、政治・経済と広範囲な活躍で功績を残した人物である。

沖繩戦当時は南部で捕虜となったのち、金武村（当時）福山、宜野座の診療所で避難民の治療にあたる。当時、避難民でごった返す中北部の收容所にはケガやマラリヤなどの伝染病、栄養失調など大勢の患者で溢れ、捕虜のなかで医師資格を持つ者も米軍医師らとともに医療活動に駆り出されている。

日記はそのころから書かれたもので、昭和二十一年四月頃までは收容所における診療所時代、以後豊見城村へ帰郷した後の様子が一日一日、欠かさずに綴られている。内容はその日の出来事や行動等が中心に記され、業務日誌あるいは備忘録的側面が顕著で、本人の主観等の吐露はほとんど見受けられないが、医師、そして地域の指導者としての立場から見た当時の社会の動きを見るうえで大変興味深い。

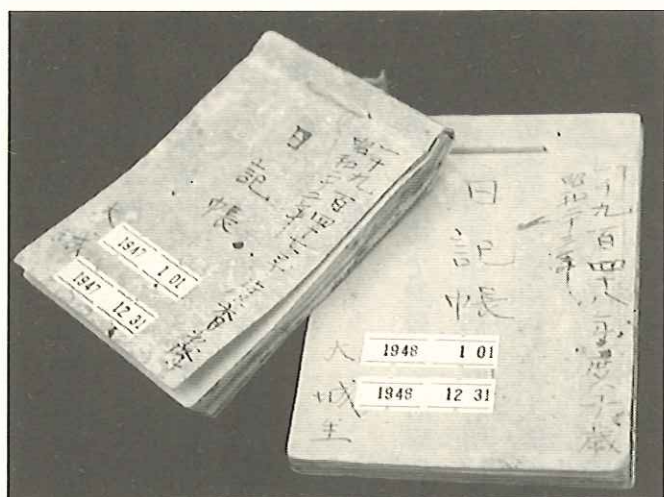
特に終戦直後、いったんは戦火を生きながらえたものの、疫病や戦傷などで苦しむ当時の住民の状況を垣間見ることが出来る貴重な根拠資料である。帰村後、生活地帯に散乱する不発弾等で爆傷を受け、氏のもとに担ぎ込まれる村民の記述などは、まさに、そのまま「戦場」をひきずってスタートした当時の社会現状そのものであり、混乱した敗戦直後の世情を知るうえで、さらに村の戦後史をより明確に裏付ける資料としてこの「日記」の史料的价值は高い。

「日記」は氏が亡くなる（昭和四十八年没）八年前まで書き続けられた。書き始めた当初の三〜四年間は物資不足のさなかであり、紙片（縦約13・5センチ×横約10・5センチ）を綴り糸でとじた手製の帳面が使用され、以降は既製品の日記帳が使われている。

今回、氏の子息である大城見教氏（豊見城村字上田六十八番地）によって大切に保存されていたものを、地域史編纂に役立つならばと、昭和二十一年〜二十三年分を複写させて戴いたものであり、貴重な資料を提供して下さった同氏に厚く御礼を申し上げます。

「村史だより第三号」では紙幅の都合により、そのうちの初年分（昭和二十一年一月〜十二月）を掲載した。なお、文章中の専門的語句等は後述の注釈を参照いただきたい。読み取り不能な字句や、一部、公開するに不都合な人物名を削除した以外は原文のままとした。

大城達宏



故大城盛昌氏が終戦直後から綴った日記。
写真は昭和22〜23年の日記帳。

一千九百四十六年（昭和二十一年）一月一日 火曜日
旧十卷月三十日

一日 中休業シ 午後一時ヨリ宜野座ニ於イテ演芸
会ヲ催ス 午後 六時頃帰ル

二日 水曜日 旧十二月一日

午後一時頃宜野座ニ行ク 日直ニテ五時頃帰ル
ズボン 黒色二枚ヲ貰フ

三日 木曜日 旧十二月二日

朝鮮人ヨリ見教ノ靴ヲ貰フ 午後五時頃宜野座ヨ
リ帰ル 雨天ナリ

四日 金曜日 旧十二月三日

宜野座ヨリランブノ配給ヲ受ク 本日寒天ナリ

五日 土曜日 旧十二月四日

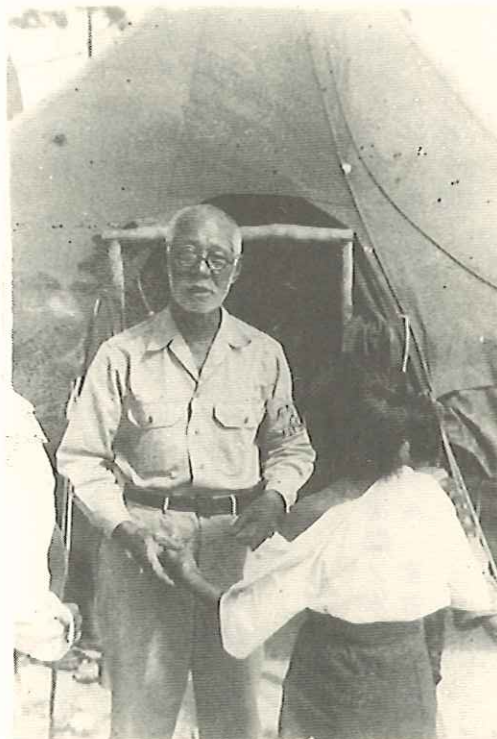
午後二時ヨリ常會ヲ開キ看護婦學校ノ設立ヲ可決
ス 午後五時頃宜野座ヨリ来ル

六日 日曜日 旧十二月五日

内ニテ看護學ノ筆記ヲ成ス スミ子奉職ニ頼ム

七日 月曜日 旧十二月六日

宜野座ヨリ帽子ノ配給ヲ受ク ヘルメット帽
看護婦學校ノ開校式ヲ挙グ



金武 收容所時代の金城盛昌氏
後方のテントは診療所（昭和二十一年四月以前）

- 八日 火曜日 旧十二月七日
 午後ヨリ宜野座病院ニ行き診察シ 五時頃帰ル
- 九日 水曜日 旧十二月八日
 産婆學校ノ講義ヲ成シ五時頃帰ル 稻福サン来ル
- 十日 木曜日 旧十二月九日
 午前九時頃 石川市ニ代表會議ニ行き五時頃帰ル
 行雄ニ面会ス
- 十一日 金曜日 旧十二月九日(誤りか?)
 宜野座ニ午前十時頃行き 午後四時頃帰ル
- 十二日 土曜日 旧十二月十日
 日直ニテ午前九時頃宜野座ニ行き 地区医師會ヲ
 終エテ午後四時頃帰宅ス
- 十三日 日曜日 旧十二月十一日
 内ニテ英語ヲ勉強ス
- 十四日 月曜日 旧十二月十二日
 午後二時 金武地方事務所ニ衛生協議会ニ行き
 午後六時頃帰ル 患者ヨリミノナ葉ヲ貰フ
- 十五日 火曜日 旧十二月十三日
 十四日ノ日記ハ十五日ト誤ル 十四日ノ日記ハ十
 五日ノモノナリ 盛進及ビキヨ子ノ夢ヲ見テ驚キ
 タリ
- 十六日 水曜日 旧十二月十四日
 本日午後四時頃 病院ニ於イテ死亡者ノ十六日祭
 ヲ墓地ニテ行フ 嘉手納清行氏ノ十六日祭ヲ墓地
 ニテ行フ
- 十七日 木曜日 旧十二月十五日
 宜野座ニ於テ頸²及軀幹胸廓ヲ講義ス 午後四時頃
 家ニ帰ル
- 十八日 金曜日 旧十二月十六日
 午後二時頃 呉屋病院ニ見學ニ行き午後五時頃宜
 野座ニ帰ル 治療及理論ノ本ヲ借用ス
- 十九日 土曜日 旧十二月十七日
 午後一時ニ宜野座ニ行き ズボン下ノ良イ物ヲ配
 給ス スイス氏婦リ箱及ビズボンシャツ等澤山貰
 フ
- 二十日 日曜日 旧十二月十八日
 雨天ニテ内ニテ薬物治療ノ理論ト實際ノ本ヲ勉強
 ス ルイス氏 午後二時訪問セラル 宮古及八重
 山郡ノ話ヲ聞ク
- 二十一日 月曜日 旧十二月十九日
 古謝市ニ病院見學ニ行き午後五時頃帰ル

二十二日 火曜日 旧十二月二十日
日直ニテ宜野座ニ行キ午后五時頃帰ル 消化器ノ
講義ヲ看護婦ニス

二十三日 水曜日 旧十二月二十一日
又吉君ヨリ ワカモト二箱ヲ貰フ 宜野座ヨリ午
后四時頃帰ル

二十四日 木曜日 旧十二月二十二日
宮城條善瀬長ヨリ 午后来ル及母ノ七三才ノ御祝ニ
テ招待セラレタリ ルイス氏本等其他色々ノ品物
ヲ貰ヒタリ

二十五日 金曜日 旧十二月二十三日
午后一時頃 宜野座ニ行キ外来診察ナシ 午后四
時半頃帰ル

二十六日 土曜日 旧十二月二十四日
宜野座ヨリ 手術服及石油ヲ貰フ 又宮平良子ヨリ
手鍋ヲ貰フ 伊佐君来リテ盛進君ノ事ヲ積レリ話
ヲ聞ク

二十七日 日曜日 旧十二月二十五日
星山君 上衣及見教君ノ靴一足ヲ修繕シテ持チテ
クル 宜野座ニ日直ニテ廻診衣ヲ宜野座病院ヨリ
貰フ

二十八日 月曜日 旧十二月二十六日
二十七日ノ日記ハ二十八日ノ誤リナリ

二十九日 火曜日 旧十二月二十七日
衛生視察ノ為前原市ニ行ク 国吉眞才氏ヲ見歸リ
ス 宮城十五、六名□ナリ

三十日 水曜日 旧十二月二十八日
宜野座病院ニテ多数ノ患者ヲ診察シ 午后五時頃
宮平良子嬢ノ結婚式ニ行ク

三十一日 木曜日 旧十二月二十九日
呉屋ノ中央病院ニ神谷君ト共ニ會議ニ行ク
會長金城紀光 幹事浜松 神谷 幸地 三人

二月一日 金曜日 旧一月一日
呉屋ニ泊シ午前九時頃宜野座ニ帰ル
會議ノ時 浜松君ヨリ聴診器ヲ貰フ 雨天

二日 土曜日 旧一月一日
内ニ帰ル事ヲ第二生田ノ上君ヨリ許可ヲ受ケ市役
所ノ高嶺氏ニ話シテ車ノ事ヲ話ス 木曜日ニ決定
ス

三日 日曜日 旧一月三日
一日中 内ニテ荷造リヲナス

四日 月曜日 旧一月四日
午後一時頃 宜野座ニ行キ多数ノ患者ノ診察シテ
(百三名) 午後五時頃帰ル

五日 火曜日 旧一月五日
午前九時頃理髪ス □□先生ノ妹ノ肋膜炎ノ穿刺
ス

六日 水曜日 旧一月六日
郷里ニ帰ルコトヲ サアース氏ニ話シタガ許可セ
ズ 石川市マデ行キ大宜味氏ニ話スレバ出来テ午
后四時頃帰ル

七日 木曜日 旧一月七日
本日午前七時頃 家ニ帰ルヲ確定セシガサアツ醫
師ノ許可シテ呉レズ 帰ルコト出来ズ

八日 金曜日 旧一月八日
午后二時頃ヨリ醫師會ヲ開ク 四時頃解散ス

九日 土曜日 旧一月九日
孤児院及養老院ニ慰問演劇會ヲ孤児院ニテ開ク
実ニ盛会ナリキ

十日 日曜日 旧一月十日
午後三時頃山城看護婦及新里産婆訪問 ミソナラ
貫ヘリ 瀬長村長ニ及ビ太郎 祐周二手紙書ク

十一日 月曜日 旧一月十一日
村長及太郎祐周二手紙出ス 日直ニテ午後五時帰
ル

十二日 火曜日 旧一月十二日
午后 宜野座病院 外来患者多類ニテ多忙ヲ極ム
十三日 水曜日 旧一月十三日
宜野座病院ニ於テ石油ヲ貰フ 又吉君明日移動ス
ル為ニ挨拶ニ来ル

十四日 木曜日 旧一月十四日
午后一時半頃 神谷仁清氏ハ伊藝ニ轉勤ヲ命ゼラ
レル 午後五時頃帰ル

十五日 金曜日 旧一月十五日
午後一時頃宜野座ニ行キ午後五時頃帰ル 院長大
田氏ニ決定セラル

十六日 土曜日 旧一月十六日
午後五時 神谷仁清氏送別會ヲ開キ午後九時頃帰
ル

十七日 日曜日 旧一月十七日
午前九時頃 古知屋ニ行キ大城一男ニ面会ス □
□ニ願ル

十八日 月曜日 旧一月十八日
午前十一時半 古知屋ノ□□サンノ六〇六注射ヲ
四人施ス

十九日 火曜日 旧一月十九日
男子生殖器ノ講義ヲ看護婦學校ニナス 病院ノ食
事問題仲本為美氏ヨリ話サル

二十日 水曜日 旧一月二十日
午後五時頃 雨天ニテ帰ル

二十一日 木曜日 旧一月二十一日
午後五時半頃 大城幸成来リ色々物ヲ貰フ布佳ニ
帰ル挨拶ノ為メ来ル

二十二日 金曜日 旧一月二十二日
福山病院古患者着ヲ貰フ 宜野座病院ヨリ午後五
時頃帰ル

二十三日 土曜日 旧一月二十三日
前掛手術服ヲ貰フ 病院ノ食事ノ件ニテ監事常會
ヲ開ク 午後七時頃帰ル

二十四日 日曜日 旧一月二十四日
一日中 内ニ於テ新聞ノ漢字ヲ勉強ス

二十五日 月曜日 旧一月二十五日
午後四時頃 名護病院ノ落成式ニ行キ盛大ナル式
デアッタ 午後七時頃帰ル

二十六日 火曜日 旧一月二十六日
午前九時二十五分 福山出發 東恩納ニ行キ醫師
會ヲ開キ午後二時頃中央病院ニ一泊ス 演藝會ヲ
見物ス

二十七日 水曜日 旧一月二十七日
午前九時四十五分 中央病院へ出發シ首里ヲ經テ糸
満ニ行ク 喜屋武 摩文仁 具志頭 玉城 知念
佐敷 大里 西原 中城 美里ヲ經テ帰ル

二十八日 木曜日 旧一月二十八日
午後五時頃 宜野座ヨリ帰ル

三月一日 金曜日 旧一月二十九日
午前八理髪ス 大城成徳君石川ヨリ来リ ズボン
二枚 白布二枚 サツ一枚ヲ貰フ

二日 土曜日 旧一月三十日
午後一時ヨリ醫師會ヲ開ク 午後四時頃閉會ス
古屋市(古知屋?)ヨリ看護婦ノ野球試合ニ来ル

三日 日曜日 旧二月一日
一日中ニテ手紙書ク 知花朝申 大城太郎 大城
祐周三人ニ書ク

四日 月曜日 旧二月二日
知花及大城太郎ニ手紙出ス 松本君内ニ来ル 宜野座ヨリ午后五時頃帰ル

五日 火曜日 旧二月三日

入院患者ノ腹水及肋膜刺穿ヲナス風邪模様ニテ午後四時半頃帰ル 雨天

六日 水曜日 旧二月四日

サアツ醫師送別會ヲ行ヒ午後九時半頃帰ル 雨天

七日 木曜日 旧二月五日

午后五時頃 常會ヲ開ク 家ニ帰り出席セズ

八日 金曜日 旧二月六日

大嶺君ノ送別會ハ若人二十名位ニテ行フ 午後五時頃ヨリ宜野座ヨリ帰ル

九日 土曜日 旧二月七日

午前九時頃 福山病院ニ行キ 午後五時頃宜野座ヨリ帰ル 三名ニサルバルサン注射ス

十日 日曜日 旧二月八日

一日中家ニ於テ 英語ヲ勉強ス 雨天

十一日 月曜日 旧二月九日

午前九時ヨリ 一、マデラ 二、久志小 三、ミヤランシン 四、辺野古 五、大浦崎

六、トーキ 七、二見 八、大浦 九、瀬嵩
十、汀間 十一、三原 十二、兼下 十三、阿部
一四、嘉陽ニ行ク

十二日 火曜日 旧二月十日

午前 福山病院ニテ診察ス 午後八雨天ニテ宜野座行キハ止ムル

十三日 水曜日 旧二月十一日

照屋氏ヨリ板ヲ貰フ 又宜野座ヨリキブス氏□□ヲ貰フ

十四日 木曜日 旧二月十二日

照屋氏ヨリ木材ヲ貰フ 比嘉看護婦ヨリ故郷ノ話ヲ聞ク

十五日 金曜日 旧二月十三日

雨戸ヲ立テル為メ 宜野座ヨリ大工来リテ雨戸ヲ作ル七名来ル

十六日 土曜日 旧二月十四日

午后四時頃 フワツクス氏及ビミヨヘン氏来リ 村病院ノ位置決定ニ付掃村ノ約束セラレタリ

十七日 日曜日 旧二月十五日

午后一時頃 古知屋ノ下原屋取ニ行キ遊ブ 古知屋 宜野座 漢那三市ノ運動會ヲ施行ス

十八日 月曜日 旧二月十六日

午前九時頃 豊見城村ニ帰り病院敷地決定ニ行き
午後七時頃 帰宅ス

十九日 火曜日 旧二月十七日

午後五時頃 宜野座ヨリ帰ル

二十日 水曜日 旧二月十八日

午前九時頃 東恩納ノ諮詢會事務所ニ會議開ク
午後四時終リ中央病院ニ一泊ス
比嘉榮昌氏□□ニテ酒ヲ飲ム

二十一日 木曜日 旧二月十九日

午前九時半 知念ノ米海軍病院視察シ晝食ヲ取り
帰りニ吳屋ノ中央病院ヲ視ル

二十二日 金曜日 旧二月二十日

病院ヨリ色カバンヲ貰フ
成徳君石川ヨリ来リテ遊ビ午後一時頃帰ル

二十三日 土曜日 旧二月二十一日

午後五時頃 ラクトフアクス氏宜野座ニ来リ病院
敷地及私ノ住宅ヲ作りテ呉レル事ヲ話ス 雨天

二十四日 日曜日 旧二月二十二日

一日 中家ニテ村長恒雄 祐周 島袋慶福氏ニ手紙
ヲ書ク

二十五日 月曜日 旧二月二十三日

祐周 村長ニ手紙出ス

二十六日 火曜日 旧二月二十四日

福山第一、第四、第五小學校児童ノ種痘ヲ接種ス
雨天

二十七日 水曜日 旧二月二十五日

福山第二 第三小學校ノ種痘接種ス
宜野座看護 婦學校ニ於テ分散會ヲ行フ

二十八日 木曜日 旧二月二十六日

午後六時 安次富君ノ婚礼御祝ニ招待サル
祖慶ヨリ十時頃帰ル 地区医師會ヲ開ク

二十九日 金曜日 旧二月二十七日

午前 福山ニテ□□□外三名ノ六〇六号ヲ注
射ス

三十日 土曜日 旧二月二十八日

午前八時頃 宜野座市役所ニ行き高嶺氏ヲ面会ニ
行ク

三十一日 日曜日 旧二月二十九日

午前 宜野川ノ周辺ニ行キツツジノ木ヲ取りテ帰
ル 午後四時頃福山第五校ノ后ノ山ニ行キツツジ
ノ木ヲ探ス

四月一日 月曜日 旧三月一日

午前九時頃 福山第一校ニ行キ種痘^註検診ニ行ク

松本君ヨリ内科入院室及内科診察所勤務員□□□

□□□

二日 火曜日 旧三月二日

第二 第三 第四 第五初等小学校ノ種痘検診ヲ行フ

三日 水曜日 旧三月三日

午後五時頃帰ル 宜野座配給所ヨリ七面鳥ノ□□ノ配給アリ ミルクヲ貰フ

四日 木曜日 旧三月四日

午後 宜野座ニ於テ座間味氏ヨリ煙草ヲ貰フ
古知屋ノ祖母様来ル

五日 金曜日 旧三月五日

午前八時ヨリ午後四時迄福山区ノ種痘ヲ殖ユ

六日 土曜日 旧三月六日

午後ヨリ宜野座ニ行キ看護婦ノ料理講習ノ為メ診察ハ休ム 雨天ニテ早ク帰ル

七日 日曜日 旧三月七日

午前九時 福山第五校ノ裏ノ山ニ行キ遊ビ 午後二時頃帰宅ス フサ子 スミ子 見教 私四名也
寒天

八日 月曜日 旧三月八日

午後六時頃家ニ帰ル 四月ノ常會ニテ色々ノ事ヲ話サル

九日 火曜日 旧三月九日

新垣運轉手ノ自動車ニテ敷布團ヲ貰ヒ帰宅ス
午後五時頃ヨリ七時頃迄酒ヲ飲ム

十日 水曜日 旧三月十日

午前八時頃ヨリ午後四時頃迄種痘ヲ施行ス
六区ノ中城熱田人ノ所ニ往診ニ行ク

十一日 木曜日 旧三月十一日

午後四時頃宜野座ヨリ帰ル 安座間ノ母様来ル

十二日 金曜日 旧三月十二日

ベッド用蚊帳ヲ借用シテ帰ル
安座間氏ノ内ニ洗面器ヲ送ル

十三日 土曜日 旧三月十三日

午後六時頃帰ル 月曜日頃米国軍醫大佐テンブル
トン氏及キャンプトン軍醫視察ニ来ル豫定也

十四日 日曜日 旧三月十四日

内ニ於テ喜屋武静子及比嘉為一氏ニ手紙書ク
秀子久志小二行ク

十五日 月曜日 旧三月十五日

午前 福山ニテ サルバルサン八名注射ス
午後 宜野座ニ行キ六時頃帰ル

十六日 火曜日 旧三月十六日

宜野座ニ於テ山本君ヨリペニシリント□□□球
菌ニ殊効果ヲ聞カサル 福山迄送ラル

十七日 水曜日 旧三月十七日

雨天ニテ惣慶ノ字ニ居リテ看護婦皆見物ニ行キ休
診ス

十八日 木曜日 旧三月十八日

代表會議ニ嘉手納ニ行キ午后ノ五時頃帰ル
ムシロヲ貰フ

十九日 金曜日 旧三月十九日

午後一時十分前 家ニ帰ル 大城静子、上地二生
来リテ連レ帰レリ 午後五時頃帰宅ス

二十日 土曜日 旧三月二十日

午前九時 福山病院ニ手術台取りニ二生上地君ニ
連レラレテ見教及私三人行キ 午後一時頃帰ル

二十一日 日曜日 旧三月二十一日

御礼廻リニ學校ニ行キ 一男氏ノ宅ニヨリ又家ニ
帰ル 晩ニハ信榮君ノ内ニ行キ御馳走ニナル

二十二日 月曜日 旧三月二十二日

糸満地区隊長及フワリス氏ノ所ニ御礼ニ行ク積モ
リシガ車ガ来ラズ中止ス 産業組合ノ件ニテ村長
助役来ル

二十三日 火曜日 旧三月二十三日

午前十一時頃 兼城字ニ行キ フワクス氏ヨリ顕
微鏡及医療器械ヲ受ケ取ル 村役場ヨリ衣服類ヲ
貰フ 産業組合長ニ選挙セララル

二十四日 水曜日 旧三月二十四日

午前九時病院ニ行キ午後六時頃帰宅ス
初メテ一般患者ノ診察ヲナス

二十五日 木曜日 旧三月二十五日

午後五時頃帰宅ス 前西リ門小蒲ヨリ毛ズボン一
枚及オーバークート一枚ヲ貰フ

二十六日 金曜日 旧三月二十六日

掛ブトン一枚及敷布團二枚、箱及靴一足ヲ配給所
ヨリ貰フ

二十七日 土曜日 旧三月二十七日

午後四時半頃 糸満ヨリ爆発物ノ為メ大損傷ヲ受
ケ十時半頃死亡ス 帰宅ハ十一時半頃ナリ

二十八日 日曜日 旧三月二十八日

一日中家ニ於テ仕事ヲナス 井戸ノ溝ヲ整理ス

二十九日 月曜日 旧三月二十九日
玉城キヨ看護婦長赴任ス 食□ヲ配給ス
成徳君石川ヨリ来ル

三十日 火曜日 旧三月三十日
午前九時病院ニ行キ 午后ノ五時頃帰ル

五月一日 水曜日 旧四月一日
真和志村ニ天然痘発生ノ報告アリテ午后ヨリ村民
ノ種痘ヲ施ス

二日 木曜日 旧四月二日
村民ノ種痘ヲ接種ス 午后ヨリ糸満地区ノ医師會
ヲ豊見城ニテ開ク

三日 金曜日 旧四月三日
午前午後 村民ノ種痘ヲ接種ス

四日 土曜日 旧四月四日
種油ノ配給一クワンアリ 午後五時頃病院ヨリ帰
ル

五日 日曜日 旧四月五日
保栄茂ニ八才及ビ十才小學生徒ノ爆死アリ
午前十時頃ナリ検死ニ行ク一人顔面ニ軽傷ヲ受ク

六日 月曜日 旧四月六日
午後一時頃 テブル、箱、□坂ヲチリ捨場ヨリ帰
リニ人ヨリ貰フ

七日 火曜日 旧四月七日
軍政府ヨリ私ノ家ノ建築ヲ始メル 大工ハ太田孝
榮、金城保一、豊平君ノ三人

八日 水曜日 旧四月八日
午前九時病院ニ勤務シ午後五時頃帰ル

九日 木曜日 旧四月九日
入院患者ハ上田ノ入院室ニ移轉ス
ムシロ一枚配給ヲ貰ヘリ

十日 金曜日 旧四月十日
村長サンノ御蔭ニテ蚊帳ヲミシン部ニ調製サセル

十一日 土曜日 旧四月十一日
病院ヨリ帰り 渡嘉敷ノ□□□□ノ主人ノ足診
察ス

十二日 日曜日 旧四月十二日
午後二時頃 村婦人會ノ結成式ヲ舉グ 午後八時
頃家ニ帰ル

十三日 月曜日 旧四月十三日

某外一人中央病院ヨリ退院ス

新門ノ后原森ノゴウ破壊ス午后二時頃ナリ

十四日 火曜日 旧四月十四日

衛生課ヨリ フンム器ヲ貰フ 白サツ及ビ猿又ヲ配給アリタリ

十五日 水曜日 旧四月十五日

稀ニ一日小雨降りシ為メ 一日中閑散ナリ 食事後晝寝セリ

十六日 木曜日 旧四月十六日

上地二生ガ洋服生地及ビ テブル掛、婦人服及スカートヲ病院ニ持チテ来テ呉レリ

十七日 金曜日 旧四月十七日

午前中ハ小雨降り午後ヨリハ晴レタリ 午後六時頃帰ル

十八日 土曜日 旧四月十八日

綾子 上地君ガ兼城ヨリ連レ来ル 午後四時 共ニ家ニ帰ル セメン瓦六百枚糸満ヨリ来ル

十九日 日曜日 旧四月十九日

一日中屋敷ノ掃デヲナス 午後五時爆発物ニヨリ負傷患者二人来ル

二十日 月曜日 旧四月二十日

午後五時頃 内ノハウス視察ニ村長、工務課長二人来ル フワックス氏 上地両氏晚ヨリハウス見ニ来ル 試験□ヲ持チ来ル

二十一日 火曜日 旧四月二十一日

午後六時頃 大工サン達ト酒ヲ飲ム 保一、豊平、太田、祐周ナリ

二十二日 水曜日 旧四月二十二日

雨天ニテ午前中内ニテ新聞ヲ讀ミ午後ヨリ病院ニ行ク

二十三日 木曜日 旧四月二十三日

午後四時頃帰ル 午後一時頃理髪セリ 冷水浴ノ為メナリ

二十四日 金曜日 旧四月二十四日

午後六時頃帰宅ス

二十五日 土曜日 旧四月二十五日

本日本板炊事場ノ木材及ビトタンヲ金太郎ノ車ニテ運搬ス

二十六日 日曜日 旧四月二十六日

午後二時 家ノゴウヨリ茶碗及ビ食器等色々ノモノヲ取ル 一日中内ニテ遊ブ

二十七日 月曜日 旧四月二十七日
午前九時半頃 雨降り出シ 五時半頃晴ル 大嶺
ノ人爆傷ス

二十八日 火曜日 旧四月二十八日
瀬長浩君 八重山ヨリ帰ル 瀬長亀次郎君ジブヨ
リ落チ打撲傷ヲ受ク

二十九日 水曜日 旧四月二十九日
長嶺校ノチフス豫防注射ヲ行フ 午後五時半頃ヨ
リ小雨トナル

三十日 木曜日 旧四月三十日
午前中ヨリ大雨ニテ患者来ラズ 午後一時頃農業
會糸満地区ノ研究會ヲ開ク

三十一日 金曜日 旧五月一日
病院係ノ上地二生ガ帰国スル為メ送別會ヲ役場内
ニテ開ク 家ヲフク 宮城氏ナリ

六月一日 土曜日 旧五月三日
小祿ノ患者ヨリ煙草十個ヲ貰フ
□□君ノ子供ヲ往診シテ診察ス

二日 日曜日 旧五月四日
午後五時頃ベン氏、野原、伊敷君三人来リ酒ヲ飲
ム 前又新門祖母ノ骨ヲ取ル

三日 月曜日 旧五月五日
午後五時頃帰ル 西リ新門母発熱シテ診察ス
与根字 招待ヲ受ク

四日 火曜日 旧五月六日
午後四時頃帰り村ノチフス豫防注射ヲ三日ヨリ始
メル 雨天

五日 水曜日 旧五月七日
チフスノ豫防注射ヲ村民ニ行フ サルバル酸注射
ヲ七名ニ行フ

六日 木曜日 旧五月八日
午後五時頃病院ヨリ帰り門ノ前ノ田小ノ草ヲ取ル

七日 金曜日 旧五月九日
午後五時頃病院ヨリ帰ル 午後十時頃 宜保尻リ
前ヨリ往診願来リテ行ツタ帰宅ハ十二時過ギナリ

八日 土曜日 旧五月十日
月給六百円貰フ フサ子二百円 スミ子百八十円
フサ子スミ子各貳十円宛小遣イヲ渡ス 正味九百四
十円

九日 日曜日 旧五月十一日
一日中 内ニテ屋敷ノ掃ヂヲナス 具志君石川ヨ
リ帰り来リテ話ス

十日 月曜日 旧五月十二日

午前午后 多数患者来リテ多忙ヲ極ム

十一日 火曜日 旧五月十三日

午后五時頃帰宅ス

十二日 水曜日 旧五月十四日

午後一時 長田氏来リ看護婦長玉城清子ノ話ヲ聞ク
産婆問題モ話ス 五時頃雨天トナル

十三日 木曜日 旧五月十五日

玉城看護婦長 兼城診療所ニ帰ル 午後四時過ぎ
帰ル 雨天

十四日 金曜日 旧五月十六日

座安ニ於テ理髪ス 午後五時頃帰宅ス

十五日 土曜日 旧五月十七日

小祿ニ於テ糸満地区医師會ヲ開ク 後首里ニ行キ
藝能ヲ見ル 帰宅午後十時頃ナリ

十六日 日曜日 旧五月十八日

知念君朝ヨリ来リ 一日中遊ブ

十七日 月曜日 旧五月十九日

〇〇〇〇〇〇ノ肋膜炎穿刺排出ス 午後五時
頃ヨリ病院職員一同ヲ集メテ話ス

十八日 火曜日 旧五月二十日

午後六時頃病院ヨリ帰宅ス 新門小ヌ前カマド見
舞ニ行ク 雨天

十九日 水曜日 旧五月二十一日

午後六時頃伊元先生、伊元産婆、玉城清子看護婦
長、東泊綾子送別會ヲ行フ

二十日 木曜日 旧五月二十二日

大城美代ノ月給百二十円宜野座病院ヨリ車ニテ持
テ来ル

二十一日 金曜日 旧五月二十三日

午後五時半頃病院ヨリ帰ル 家ノ枯木ヲキル
島袋氏ヨリ酒ヲ貰フ

二十二日 土曜日 旧五月二十四日

午前診察シ午後ヨリハ掃子ノ為ト帰り家ノ新ハウ
スノ溝ヲ取ル 午後六時雨天トナル

二十三日 日曜日 旧五月二十五日

午前七時 家族一同後原ノ百号甘藷ヲ午後一時マ
デニ植付ク

二十四日 月曜日 旧五月二十六日

午後六時頃帰宅シ上門及ビ新門小ヌ前ニ往診ニ行
ク

二十五日 火曜日 旧五月二十七日
上田校及座安校学生ノチブス豫防注射第二回目ヲ
行フ 午后五時頃帰ル

二十六日 水曜日 旧五月二十八日
座安校ノチブス豫防注射ヲ施行ス
字事務所落成式ニ行ク

二十七日 木曜日 旧五月二十九日
座安渡橋名ノチブス豫防注射ヲ行フ

二十八日 金曜日 旧五月三十日
午后五時頃帰宅ス 暑気甚ダシリ炎天也

二十九日 土曜日 旧六月壹日
徳新門小ヨシ子ノ一周年忌ニテ行ク

三十日 日曜日 旧六月三日
内ニテ一日中新割リノ加勢ヲナス 新家屋ニテ夜
ハ休ム

七月一日 月曜日 旧六月四日
女口カメ来ル キヨ子中央病院ニ送ル
上原氏ヨリ戸及ビ板材ヲ馬車ニテ運搬セリ

二日 火曜日 旧六月五日
午后六時頃帰宅ス 東風平村当銘ノ人房子知合ノ
人来ル

三日 水曜日 旧六月六日
午后五時頃帰宅ス □□□□ノ母子共ニサルバ
ルサンヲ注射ス

四日 木曜日 旧六月七日
浜松君午后四時頃知念地区ヨリ遊ビニ来ル

五日 金曜日 旧六月八日
午后二時頃ヨリ雨天トナル 五時半頃帰宅ス

六日 土曜日 旧六月九日
午后一時頃帰宅シ畑ヲ耕作ス

七日 日曜日 旧六月十日
午後二時頃マデ畑ヲ耕シ午後三時頃ヨリ内ニテ休
ム

八日 月曜日 旧六月十一日
午後五時頃帰宅ス 外間金松君ヨリ章魚(タコ)
ノ送り物アリタリ

九日 火曜日 旧六月十二日
月給三名分九百八十円受ケ取ル 正味九百二十円

十日 水曜日 旧六月十三日
午後五時 瀬長亀次郎君米酒ヲ久米島人ヨリ貰ヒ
来リ飲ム

十一日 木曜日 旧六月十四日
 午后三時頃□□□ノノサルバル酸ヲ注射ス
 十二日 金曜日 旧六月十五日
 午后五時頃帰宅ス 前又畑ニテ草ヲ焼ク
 十三日 土曜日 旧六月十六日
 午后二時頃帰宅ス 門前ノ草ヲ刈ル 理髪ス
 十四日 日曜日 旧六月十七日
 庭草ヲ刈ル為メニ右手拇指ヲ切傷ス
 ダイナマイトニテ大嶺人負傷ス
 十五日 月曜日 旧六月十八日
 午前十一時半頃 壺屋ニ地区医師會ニテ會合シ午
 后六時頃帰宅ス
 十六日 火曜日 旧六月十九日
 午后五時ヨリ醫師會報告會ヲ開ク
 森山氏五月月給ノ□印ニ來ル
 十七日 水曜日 旧六月二十日
 午后三時半頃ヨリ雨天ニテ知花氏ノ雨具ヲ借りテ
 帰宅ス
 十八日 木曜日 旧六月二十一日
 雨天ノ為メ午前中ハ病院ヲ休ミ 午後ヨリ出勤セ
 ルガ患者來ラズ帰ル

十九日 金曜日 旧六月二十二日
 午前中ハ雨晴レシモ午後一時頃ヨリ大雨トナル
 三時半頃帰宅ス
 二十日 土曜日 旧六月二十三日
 一日中小雨ニテ降り續ク 上原氏ノ所ニ煙草ヲヤ
 ル
 二十一日 日曜日 旧六月二十四日
 前又新屋敷小地ノ甘藷ヲ植ユ 前荒廢地ヲ耕ス
 二十二日 月曜日 旧六月二十五日
 午前中晴レシモ午後ヨリ雨天トナル 五時頃帰宅
 ス
 二十三日 火曜日 旧六月二十六日
 時々小雨アリタリ 字与根ヨリ招待セラレタリ
 午後二時帰宅ス 綱引ニテ招待セララル
 二十四日 水曜日 旧六月二十七日
 時々小雨降りテ外来患者少ナシ 午後四時頃帰宅
 ス
 二十五日 木曜日 旧六月二十八日
 豊見城ノ□□□□十五才ノ少年 血友病ニテ中
 央病院ニ送ル

二十六日 金曜日 旧六月二十九日
午后五時頃帰宅ス 上田校長宜保徳助先生小作ノ
件ニテ来訪セラル

二十七日 土曜日 旧六月三十日
午后二時頃帰宅ス 金松君鼠取器ヲ見ニ来ル
小作地ヲ視察ニ行ク

二十八日 日曜日 旧七月一日
一日中内ノ庭ノ土ヲ打返ス 島袋勝助君訪問セリ

二十九日 月曜日 旧七月老日
午后三時 村農業會ノ役員會ヲ開キ一九四六年度
ノ收支豫定ヲ協議ス 七時頃帰宅ス

三十日 火曜日 旧七月三日
午后五時頃帰宅シ英語ノ藥品名ヲ研究ス

三十一日 水曜日 旧七月四日
午后四時 農業會總會ヲ開キ六時頃閉會ス

八月一日 木曜日 旧七月五日
午后ヨリ英語ノ藥品名講習會ヲ始メル 病院ニテ
行フ

二日 金曜日 旧七月六日
午后四時頃ヨリ南側ノ木陰ニテ英語ノ講習ヲナス
森山氏来ル

三日 土曜日 旧七月七日
正午十二時頃帰宅ス 南又新門小父来リ 役場ノ
前土地ノ境ヲ見ル

四日 日曜日 旧七月八日
西シ新門地ノ境□ヲ大フ新屋敷、三男新東リ、仲
大城小トノ境ニホ木ヲ植ユ 一日中内ニテ英語ヲ
習フ

五日 月曜日 旧七月九日
午后一時頃英語講習ヲ開キ午后六時頃帰宅ス
箱ヲ貰フ 各領金ヲ報告ス

六日 火曜日 旧七月十日
午后八時頃英語講習會ヲ開キ 五時頃帰宅ス

七日 水曜日 旧七月十一日
英語講習會ヲ開キ午後六時頃帰宅ス 雨天

八日 木曜日 旧七月十二日
午后三時頃 具志校長ノ精神講話アリ 五時頃帰
宅ス 雨天

九日 金曜日 旧七月十三日
雨天ニテ患者少ナシ 英語講習ヲナシ 四時頃帰
宅ス 理髮ス

十日 土曜日 旧七月十四日
 午前十一時半頃 百名ノ中央病院ニ南部医師會ニ
 テ行ク 帰宅ハ午後七時頃
 十一日 日曜日 旧七月十五日
 午前中ハ後原ノウネ艦砲ニテ破クワイセシヲ直シ
 十五日ノ御送イヲナス
 十二日 月曜日 旧七月十六日
 午後六時頃帰宅ス 英語講習會ヲ行フ
 十三日 火曜日 旧七月十七日
 英語講習ヲ行ヒ午後五時半頃帰宅ス
 十四日 水曜日 旧七月十八日
 午後五時帰宅ス 月給ヲ貰フ 英語講習ヲ行フ
 十五日 木曜日 旧七月十九日
 糸満病院ニ長田紀秀氏ノ送別會ニ行ク 午後七時
 頃帰宅ス
 十六日 金曜日 旧七月二十日
 午後六時頃帰宅ス 英語講習會ヲ行フ
 十七日 土曜日 旧七月二十一日
 午後一時頃帰宅シ后原ノ畑ヲ耕作ス 午後十時頃
 □□□入院室ニテ死亡ス

十八日 日曜日 旧七月二十二日
 一日中内ニテ英語ヲ勉強ス ウト、基繁、光子、
 貴□ノ靈ヲ連レ来ル
 十九日 月曜日 旧七月二十三日
 午後六時頃小禄ヨリケ俄人來リ 三名ハ中央病院
 ニ送ル
 二十日 火曜日 旧七月二十四日
 午後二時頃ヨリ病名ノ英語ヲ講習ス 七月分月給
 百八十円、房子同上、百四十円澄子
 二十一日 水曜日 旧七月二十五日
 午後六時頃帰宅ス 英語講習ヲ行フ 野原君中村
 君ヨリ衣服ヲ借ル
 二十二日 木曜日 旧七月二十六日
 英語講習ヲ行フ 午後五時頃帰宅ス 栄行君來ル
 二十三日 金曜日 旧七月二十七日
 田辺勝之氏ヨリ手紙來ル 英語講習ヲ行フ 午後
 五時頃帰宅ス
 二十四日 土曜日 旧七月二十八日
 午後二時頃 渡嘉敷□□ノ父ヲ診察シ帰宅ス 英
 語勉強ス

二十五日 日曜日 旧七月二十九日
一日中畑ヲ耕作ス 大城綾子モ来リ加勢ス

二十六日 月曜日 旧八月一日
午后四時頃帰宅ス 盛善鹿兒島ヨリ帰宅ス

二十七日 火曜日 旧八月老日
午后五時頃帰宅ス 英語講習ヲヤル

二十八日 水曜日 旧八月三日
午后二時頃帰宅ス 英語講習ハ休ム 正子来ル
畑ノ溝ノ土ヲ揚グ

二十九日 木曜日 旧八月四日
午后六時頃帰宅ス 看護婦受験ノ為メ教育ハ英語
講習中止ス

三十日 金曜日 旧八月五日
午后三時頃帰宅ス 英語講習中止ス

三十一日 土曜日 旧八月六日
午后二時頃帰宅ス 英語ヲ勉強ス

九月一日 日曜日 旧八月七日
午前午後英語勉強ス 午後七時頃大城ノ家屋落成
祝ニ行ク

二日 月曜日 旧八月八日
本日ヨリ大工家ノ修繕ニ来ル 午后二時頃帰宅ス

三日 火曜日 旧八月九日
午后三時頃帰宅ス 英語勉強ス 夜ハ事務所ニ行
ク 土地委員会ノ事ニ付イテ

四日 水曜日 旧八月十日
午后二時頃帰宅ス 英語勉強ス

五日 木曜日 旧八月十一日
午后二時頃帰宅ス 内ニテ高安ノ子供ノ骨折ヲ整
□ス

六日 金曜日 旧八月十二日
午后四時頃帰宅ス 大工午後五時頃糸満ニ行ク

七日 土曜日 旧八月十三日
有銘氏本日ハ休業ス 午後一時頃帰宅ス

八日 日曜日 旧八月十四日
午前中畑ヲ耕ス 仲地ノ子供爆傷ス 午後二時頃
ヨリ雨天トナル

九日 月曜日 旧八月十四日
後原畑三口インナヨヲ植付ク 有銘氏モ加勢ス

十日 火曜日 旧八月十五日

午後二時頃ヨリ真和志ニ於テ 糸満地区醫療團ノ
會議ヲ開ク 観月會ヲ開ク

十一日 水曜日 旧八月十六日

午前及ビ午后約二時間位雨降ル 午後六時頃帰宅
ス醫師會ノ報告ノ為メ

十二日 木曜日 旧八月十七日

午後三時帰宅シ野菜物ヲ植付ク 午前二時間位
雨降ル

十三日 金曜日 旧八月十八日

午後二時頃帰宅ス 畑ヲ耕作ス

十四日 土曜日 旧八月十九日

午後一時頃帰宅ス 後原ノ畑ヲ耕作ス

十五日 日曜日 旧八月二十日

一日中後原ノ畑ヲ耕作ス

十六日 月曜日 旧八月二十一日

午後二時頃帰宅ス 内ニテ新聞ヲ見ル

十七日 火曜日 旧八月二十二日

午前五時半頃 地雷爆発ノ為メ一名死亡ス
午後五時頃葬式ス

十八日 水曜日 旧八月二十三日

南又新門小及新徳新門小ヨリフスマ材料ヲ貰フ
病院休ム

十九日 木曜日 旧八月二十四日

午後一時頃帰宅ス

二十日 金曜日 旧八月二十五日

午後三時頃帰宅ス 耕作セル畑ニ草ヲ焼ク

二十一日 土曜日 旧八月二十六日

午後二時頃帰宅ス 後原ノ農道ノ草ヲ刈ル

二十二日 日曜日 旧八月二十七日

午前中農道ノ草ヲ刈ル 午後ハ不快ニテ休ム

二十三日 月曜日 旧八月二十八日

午後五時頃帰宅ス 月給六百元貰フ

二十四日 火曜日 旧八月二十九日

清口法ニテ大口ナス 新聞ヲ見ル

二十五日 水曜日 旧九月一日

後原畑ヲ耕ス 天氣悪ク時々雨ガ降ル

二十六日 木曜日 旧九月二日

午後四時頃 後原ノ畑ニ前呈カズラヲ植付ク
有銘氏大工ヲ止メ一時引き揚グ 東ノ一畑

二十七日 金曜日 旧九月三日
後原ノ畑ニ八重山アカグカズラヲ植付ク 西シ畑
一切 有銘氏自分ノ家造リノ為メ一時引揚グ

二十八日 土曜日 旧九月四日
本日ノ午后ヨリ移轉準備ヲ始ム 午后二時頃帰宅
ス

二十九日 日曜日 旧九月五日
本日入院室ヨリ本宅ニ移轉ス 綾子モ来リ加勢ス
午后四時ヨリ事務所ニ戸主會ニテ集合ス

三十日 月曜日 旧九月六日
午后二時頃帰宅ス 後原ノ畑ノ草ヲ取ル

十月一日 火曜日 旧九月七日
後原農道ノ草ヲ刈ル 座安校ニテ三校ノ競技會ヲ
開ク

二日 水曜日 旧九月八日
午后二時頃帰宅ス 午前四時□□□□□□女
子ヲ安産ス 医師ノ希望地ノ事ヲ書キ出ス

三日 木曜日 旧九月九日
午后四時頃帰宅ス 焼傷ヨリノケガ人来ル 瀬長
村長ノ宅□□往診ス

四日 金曜日 旧九月十日
午后三時頃帰宅ス 新門小又前ニ行雄君ヲ見舞ニ
行ク

五日 土曜日 旧九月十一日
午後一時頃帰宅ス 午后四時頃伊良波、□□□□
□ アキレス氏腱切断シテ来ル

六日 日曜日 旧九月十二日
午前十一時頃宏一君疎開ヨリ帰ル 今度ノ戦争ノ
為メ死亡セル十五名ノ祭ヲナセリ

七日 月曜日 旧九月十三日
午後五時頃帰宅ス 西原ノウサ小帰ル

八日 火曜日 旧九月十四日
午后三時頃帰宅ス 入院室ノ患者ヲ診察ス

九日 水曜日 旧九月十五日
午後二時頃帰宅ス 今晚雨降ル

十日 木曜日 旧九月十六日
午后四時頃帰宅ス 後原ノ溝ノ土ヲ揚グ 午后六
時頃帰ル

十一日 金曜日 旧九月十七日
午后三時頃帰宅ス 高安ノ□□□□□□ノ女の子
筋炎ニテ入院ス

十二日 土曜日 旧九月十八日
午后二時醫師会ニテ三和村ニ行キ六時頃帰宅ス

十三日 日曜日 旧九月十九日
與儀ヒデ子、澤岷照子、平良ウト、泉川、当山蒲、
喜屋武静子、六名ニ手紙出ス 一日中手紙書ク

十四日 月曜日 旧九月二十日
午后二時頃帰宅ス 内ニ於テ新聞ヲ視ル

十五日 火曜日 旧九月二十一日
午后三時頃帰宅ス 広一ノ金ヲ宇久里先生ヨリ受
ケ取ル 后原畑ヲ耕作ス

十六日 水曜日 旧九月二十二日
午后二時頃帰宅ス 風邪気味ニテ内ニテ休ム

十七日 木曜日 旧九月二十三日
午后二時頃帰宅ス 醫師復歴書提出ノ事ニ付イテ
森山、伊敷、浦崎三氏来ル 風邪気味ナリ

十八日 金曜日 旧九月二十四日
午后四時頃帰宅ス 復歴書提出ス 后原畑耕作ス
風邪気味ナリ

十九日 土曜日 旧九月二十五日
午后二時頃帰宅ス 風邪気味ニテ内ニテ休ム

二十日 日曜日 旧九月二十六日
風邪ニテ一日中内ニテ休ム

二十一日 月曜日 旧九月二十七日
風邪ニテ一日中内ニテ休ム

二十二日 火曜日 旧九月二十八日
午后一時頃帰宅ス 帰宅後内ニテ風邪ナルガ故ニ
休ム

二十三日 水曜日 旧九月二十九日
一日中風邪ニテ病院ヲ休ミ臥ス

二十四日 木曜日 旧九月三十日
午后一時頃帰宅ス 后原ノ畑ニ草ヲ焼ク

二十五日 金曜日 旧十月一日
午后二時頃帰宅ス 風邪ニテ内ニテ休ム

二十六日 土曜日 旧十月二日
午后一時頃帰宅ス 風邪気味ニテ休ム

二十七日 日曜日 旧十月三日
后原畑ヲ耕作ス 又畑ノアブシヲ揚グ 風邪気味
ナリ

二十八日 月曜日 旧十月四日
午后一時半頃帰宅ス 后原畑ノ溝ヲ取ル

二十九日 火曜日 旧十月五日
午后二時頃帰宅ス 後原ノ畑ニ枯草ヲ焼ク

三十日 水曜日 旧十月六日
糸満地区ノ衛生課長會議ヲ村役場ノ會議室ニ於テ
開ク 午后七時頃帰宅ス

三十一日 木曜日 旧十月七日
午后三時頃帰宅ス 後原畑ニ枯草ヲ焼ク

十一月一日 金曜日 旧十月八日
午后四時頃帰宅ス 我那覇前又金城又前兄来リ
小作地ヲ見セル

二日 土曜日 旧十月九日
午后一時頃帰宅ス 内ニテ新聞ヲ讀ム

三日 日曜日 旧十月十日
新門小又前ヨリ三人来リ 内ノ三人ト共ニ後原ノ
畑ヲ耕作ス 安座間サン来ル

四日 月曜日 旧十月十一日
午后三時頃帰宅ス 理髮ス 新新門小成正来ル
鶏ヲ買フ 二百円也 雨天

五日 火曜日 旧十月十二日
午后二時頃帰宅ス 東リ新門小博帰ル 東リ新門
小二行ク 一日中小雨フル

六日 水曜日 旧十月十三日
後原畑ニ百号及前里カンヲ植付ク 麥モ植付ク
クフワウルオイ也 宜保君来ル

七日 木曜日 旧十月十四日
午后ヨリ入院室前ノ畑ニ野菜ヲマク 晩ニハ小雨
フル

八日 金曜日 旧十月十五日
午后三時頃帰宅ス 内ニテ風邪氣味ニテ休ム
盛助君ニ手紙出ス

九日 土曜日 旧十月十六日
午后一時頃帰宅ス 長嶺校生徒六名爆傷ニテ来リ
治療ス

十日 日曜日 旧十月十七日
大嶺ヨリ三人来リ 后原ノ畑ヲ耕ス

十一日 月曜日 旧十月十八日
午后四時頃帰宅ス 内ニテ新聞ヲ讀ム

十二日 火曜日 旧十月十九日
午后三時頃帰宅ス 前ノ畑ノ草ヲ取ル 掛蒲團ノ
配給アリタリ

十三日 水曜日 旧十月二十日
午后三時頃帰宅ス 内ニテ休ム

十四日 木曜日 旧十月二十一日
午後四時頃帰宅ス 上原君ガ盛男君手紙ヲ持チテ
来テ渡ス 後原ノ畑ノ草ヲ刈ル

二十二日 金曜日 旧十月二十九日
午後三時頃帰宅ス 内ニテ新聞ヲ讀ム 知花氏ヨ
リ茶及ビ線香ヲ貰フ

十五日 金曜日 旧十月二十二日
午前十時頃 知念、糸満地区南部醫療團會議ヲ開
ク 午後六時頃帰ル

二十三日 土曜日 旧十月三十日
午後一時頃帰宅ス 後原ノ畑ヲ耕作ス 新屋敷ノ
親一君帰郷シ訪問ス

十六日 土曜日 旧十月二十三日
午後三時頃帰宅ス 前又畑ヲ耕ス 宜保成晴帰ル

二十四日 日曜日 旧十一月一日
新門牛吉、宜保寛祐、大新屋敷栄子、新徳新門小
次郎 四人シテ井戸ヲサラウ 大嶺人爆傷ス

十七日 日曜日 旧十月二十四日
風邪気味ニテ一日中休ム

二十五日 月曜日 旧十一月二日
午後二時頃帰宅ス 畑ヲ耕作ス 明孝君来訪ス

十八日 月曜日 旧十月二十五日
一日中内ニテ扁桃腺炎ノ為メ休ム

二十六日 火曜日 旧十一月三日
午後三時頃帰宅ス 前又畑ヲ耕作ス

十九日 火曜日 旧十月二十六日
扁桃腺炎ノ為メ病院ヲ休ム 大掃ヂシテ又吉君来
ル 洋服地ノ配給アリタリ

二十七日 水曜日 旧十一月四日
午後三時頃帰宅ス 前又畑ヲ耕作ス 大城信君来
訪ス

二十日 水曜日 旧十月二十七日
午後三時頃帰宅ス 内ニテ休ム 新聞ヲ讀ム

二十八日 木曜日 旧十一月五日
午後四時頃帰宅ス 瀬長村長来リ酒ヲ飲ム

二十一日 木曜日 旧十月二十八日
午後四時頃帰宅ス 宜保成晴氏来ル

二十九日 金曜日 旧十一月六日
午後二時頃帰宅ス 前又畑ヲ耕作ス

三十日 土曜日 旧十一月七日
午后三時頃帰宅ス 前又畑ヲ耕作ス 豊見城ノ女
ケガス

十二月一日 日曜日 旧十一月八日
一日中前又畑ヲ耕作ス 武富ノ□□□ノ子供治療
ス

二日 月曜日 旧十一月九日
午前一時頃小雨降ル カンランヲ植付ク 婦佐子
婚礼式ヲ行フ 寒天

三日 火曜日 旧十一月十日
午后三時頃帰宅シ内ニテ新聞ヲ讀ム 寒天

四日 水曜日 旧十一月十一日
午后二時頃帰宅ス 後原ノ畑ヲ耕作ス

五日 木曜日 旧十一月十二日
午后二時頃帰宅ス 日渡氏来リ面会ス 後原畑ヲ
耕ス

六日 金曜日 旧十一月十三日
後原ノ畑ヲ耕作ス 根差部ノミツ子ノ結婚式アリ
タリ 大嶺一男君来ル

七日 土曜日 旧十一月十四日
午后一時頃帰宅シ後原ノ畑ヲ耕作ス 午后十一時
頃ヨリ小雨降ル

八日 日曜日 旧十一月十五日
午前十時頃マデ小雨降りタリ ゴボウ植付ク
友寄、大城、小波津三人訪問ス

九日 月曜日 旧十一月十六日
午后三時帰宅ス 内ニテ新聞讀ム 勇成君帰ル

十日 火曜日 旧十一月十七日
午后二時頃帰宅ス 後原ノ畑ヲ耕作ス

十一日 水曜日 旧十一月十八日
午后三時頃帰宅ス 兼城ノ薬品倉康ノ拂下ダノ件
ニ付キ 助役ト共ニ工務出張所ニ行ク

十二日 木曜日 旧十一月十九日
正午十二時頃帰宅ス 後原ノ畑ヲ耕作ス 大掃ヂ
ナリ 有銘氏来ル

十三日 金曜日 旧十一月二十日
盛男君午前十時帰宅ス 知花氏来訪ス

十四日 土曜日 旧十一月二十一日
午前九時頃□屋ニ醫師会ニテ集会シ 午后四時頃
帰宅ス 山羊ヲ買フ 千七百円

十五日 日曜日 旧十一月二十二日
池ノ端ノアブシヲ揚グ 宜保、具志両校長訪問
有銘氏休ム

十六日 月曜日 旧十一月二十三日
午后四時頃帰宅ス 糸満地区醫師会ノ報告ヲナス

十七日 火曜日 旧十一月二十四日
午后四時頃帰宅ス 有銘氏休ム

十八日 水曜日 旧十一月二十五日
午后三時頃帰宅ス 有銘氏休ム 渡橋名次男大屋
ニ行ク

十九日 木曜日 旧十一月二十六日
午后四時頃帰宅ス 各会長會議ヲ開ク

二十日 金曜日 旧十一月二十七日
午后三時頃帰宅ス 後原ノ畑ヲ耕ス 上原氏来訪
ス

二十一日 土曜日 旧十一月二十八日
雨天、午后二時頃帰宅ス 内ニテ雑誌ヲ讀ム
有銘氏休ム

二十二日 日曜日 旧十二月一日
一日中雨天 有銘氏休ム

二十三日 月曜日 旧十二月二日
午后五時頃帰宅ス

二十四日 火曜日 旧十二月三日
午后三時頃帰宅ス 仲地南又大屋又三男ヨリ機械
買ヒ内ニ持チ帰ル

二十五日 水曜日 旧十二月四日
クリスマスニ付キ 病院ヲ休ム 有銘氏妻ノ分娩
ニテ帰ル

二十六日 木曜日 旧十二月五日
午后三時頃帰宅ス 有銘氏休ム 晩頃小雨降ル

二十七日 金曜日 旧十二月六日
午后三時頃帰宅ス 内ニテ休ム 雨天 有銘氏休ム

二十八日 土曜日 旧十二月七日
午后二時頃帰宅ス 仲筋毛ノ松木ヲ運搬ス 有銘
氏本日来ル

二十九日 日曜日 旧十二月八日
有銘氏自分ノ松木ヲ渡嘉敷ウガンヨリ切ル 内ノ
者モ加勢ス

三十日 月曜日 旧十二月九日
仲地□□ニ往診ニ行ク 午後六時頃長堂ノ人入院
ス

三十一日 火曜日 旧十二月十日
本日午前中有銘氏仕事シ午後ハ休ム 知花氏ノ所
ニ行キ酒ヲ飲ム

〔語註〕

- 1 ミソナ葉 フダンソウ（植物）、方言ではンスナバーとも呼んでいる。若い葉を油で炒めたり、ゆでて食用にする。食糧難だった戦後は、雑炊などによく利用された。
- 2 頸及軀幹胸廓 「首および軀幹胸郭（くかんきょうかく）」と読む。首から胸部（骨格）及び身体の意味。
- 3 肋膜炎 おもに結核菌による肋膜の炎症。胸や背中が痛む。沖繩地方は戦前から結核の多い地域として知られていたが、沖繩戦以降は、激烈な戦闘による心身の極度疲労や衣食住の破綻により、戦場を生き延びた多くの結核患者が死亡した。
- 4 穿刺 「せんし」と読む。身体に針を刺し、体液を抜き取る医療行為。肋膜炎などに罹患すると患部に水がたまる症状があり、この穿刺の行為が施された。
- 5 六〇六号 性病、梅毒を対症とした薬品名、ヒ素材。体質改善薬としても使われた。
- 6 サルバルサン（酸） 5の別称。
- 7 種痘 天然痘予防のために牛痘を人体に植え付けること。沖繩では米占領と同時に伝染病予

8 天然痘 伝染病。高熱を出し赤い発疹ができて回復後も跡が残る。痘瘡とも呼び、沖繩では「チラガサー」とも呼ばれた。昭和十年代以降県内での発生は見られないが、沖繩戦以降、外地からの引き揚げ者によって痘瘡が八重山、宮古群島へも侵入、本島内での発生は記録に残っていない。

- 9 不発弾による爆発事故は終戦直後各地で頻繁に発生した。当時は畑や屋敷内などいたるところに不発弾が散乱しており、農作業などに誤って地雷を踏んだりして爆傷する事故から、子供達の実弾遊びによる負傷、死亡するケースが日常的に発生した。
- 10 チフス チフス菌によって伝染する伝染病の総称。
- 11 百号甘藷 昭和十年から戦後の十年間奨励された甘藷（サツマイモ）の品種。

第6巻「戦争編」執筆担当者

(豊見城村史専門部会部員名簿)

| 氏名 | 職名等 | 執筆担当区分 |
|-------------------|----------------------|-------------------------------------|
| 1 安仁屋政昭 (部会長) | 沖縄国際大学教授 | 第1章「戦争への道のり」 第7章「太平洋戦争の終結と沖縄の地位」 |
| 2 長嶺 栄一 (副部会長) | 元 教員 | 第3章「村内の戦場のようす」 |
| 3 井上秀雄 | 沖縄県立芸術大学 教授 | 第3章「村内の戦場のようす」 第6章「戦火止んで」 |
| 4 吉浜 忍 | 県立公文書館資料 編集室主任専門員 | 第5章「沖縄戦の終結と被害」 |
| 5 平良宗潤 | 県立糸満高等学校 教諭 | 第2章「戦時体制への移行」 |
| 6 大城 勲 | 県立糸満高等学校 教諭 | 第4章「村民の戦争体験」 |
| 7 登川吉雄 | 元 教員 | 第2章「戦時体制への移行」 第3章「村内の戦場のようす」 |
| 8 大城正祺 | 元 県職員 | 第6章「戦火止んで」 |

村民の戦時・戦後体験記(談)の 募集について

豊見城村は、村史編集事業として「村民の戦時・戦後体験記(談)」を広く募集し、平成十一年度を目標に村史第六巻「戦争編」にまとめて、出版する計画です。苛酷な太平洋戦争を生き延びてきた村民を主人公とし、それぞれの体験を次代に書き残そう、というものです。

筆不精の方には、聞き取りを行う職員がお話しをうかがいにまいります。次のような体験をお持ちの方は、ぜひ御連絡ください。

(例) ①軍隊・郷土防衛隊、鉄血勤皇隊、女子挺身隊、その他の軍属など従軍体験者 ②山原疎開、学童疎開、一般疎開体験者 ③壕掘り、飛行場設置作業など徴用の様子 ④食糧や家畜・物品土地等の供出状況を記憶されている方あるいは体験者 ⑤戦時下政策や当時の庶民の暮らしについては ⑥村内の戦争のようす、戦場(南部)での彷徨 ⑦捕虜、収容所での様子 ⑧比国、南洋、その他外地で戦争体験終戦、引き揚げした方 ⑨伊良波、座安・渡橋名収容所の体験者 ⑩その他の戦争体験者のみなさん

連絡先・豊見城村教育委員会

村史編さん室

電話 (〇九八) 八五六―三六七―

豊見城村史編纂室業務日誌

| | | |
|------|-------|----------------------------|
| 平成8年 | 11・4 | 『金武町史』移民編出版祝賀会 |
| | 11・7 | 沖繩学版にて、著作権などについてアドバイスを受ける。 |
| | 11・15 | 第12回自分史づくり講座 |
| | 11・22 | 第13回自分史づくり講座 |
| | 11・28 | 第14回自分史づくり講座 |
| | 12・6 | 第15回自分史づくり講座 |
| | 12・7 | 図書館講座 |
| | 12・10 | 田港朝和氏来室。近代統計資料について調製 |
| | 12・13 | 第16回自分史づくり講座 |
| | 12・27 | 御用納め |
| 平成9年 | 1・6 | 御用始め |
| | 1・17 | 第17回自分史づくり講座 |
| | 1・24 | 第6巻戦争編専門部会（第1回） 図書館講座 |
| | 2・1 | 琉球大学上里賢一教授に林鴻年の漢詩解読を依頼 |
| | 2・3 | 赤嶺喜之助氏所蔵掛軸写真撮影（阿波根直孝氏儀間） |
| | 3・3 | 大分県安心院町へ学童疎開調査事前紹介文発送 |
| | 3・5 | 大城正祺氏よりジュラルミン製湯船奇贈 |

| | | |
|--|-------|--|
| | 11・9 | 字金良戦争被災調査（吉浜忍氏・大城正祺氏吉永・達宏） |
| | 11・11 | 字伊良波大城亀保氏より写真5点借用 |
| | 11・14 | 第18回自分史づくり講座 |
| | 11・14 | 字豊見城学童疎開聞き取り調査（吉浜忍氏・吉永・達宏） |
| | 11・12 | 第19回自分史づくり講座 |
| | 11・22 | 地域史協議会研修 於…今帰仁（吉永・儀間） 村史編集委員会 |
| | 11・24 | 学童疎開調査宮崎県高千穂町・大分県立公文書館・安心院町（長嶺栄一氏・登川吉雄氏・吉浜忍氏・達宏） |
| | 11・28 | 自分史づくり講座閉講式 文集発行 |
| | 12・2 | 第6巻戦争編専門部会 |
| | 12・15 | 長嶺栄一氏・登川吉雄氏旧字図作成の為来室 |
| | 12・24 | 字真玉橋金城信夫氏等来室 |
| | 12・25 | 經濟部農振係より図面等譲り受ける |
| | 12・25 | 南風原文化センター「屋良朝苗展」見学 |
| | 12・13 | 文化係より図書2冊寄贈「ダバオの思い出」 |
| | 12・14 | 「豊見城区教育委員会アルバム」 那覇市宇栄原具志家文書写真撮影 （當間一郎氏・宜保・達宏・儀間） |
| | 12・14 | 第6巻戦争編専門部会 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|----------------------|--------------|------------------------------|------------------------------|----------------------|-------------------|---------------------|--------------|--------------|-----------------------------|-------------------------------------|-----------------------|----------|-----------------------|---------------------|------------------|-----------------|--|------------------|-------------------|--------------------------------|--------------------|------------------------|--------------|----------------------------|
| 17 | 16 | 15 | 14 | 7 3 | 26 | 24 | 17 | 8 | 6 3 | 30 | 28 | 26 | 22 | | | | | | | | | | | | |
| 達宏) | 字渡嘉敷旧字図作成のため聞き取り(吉永・ | 第9巻文献資料編専門部会 | 字伊良波大城秀雄氏より写真3点借用 (吉永・儀間) | 第9巻文献資料編現場説明 第9巻文献資料編競争入札 | 国土地理院沖繩支所にて大正8年地形図閲覧 | 戦前、戦後写真展見学 於…沖尚高校 | 字上田大城盛次郎氏よりトロソコ車輪寄贈 | 第9巻文献資料編現場説明 | 第9巻文献資料編競争入札 | 文化係と字上田山部隊の壕現地確認(達宏・ 儀間) | 字上田大城盛次郎氏より民具(馬具・脱穀機 等)、園連関係資料寄贈 | 字上田大城見教氏より日記帳(1946年分) | アルバム2冊借用 | 地域史協議会総会 於…金武町(吉永・達宏) | 玉城村企画課来室 村史編集の件について | 字上田大城見教氏より写真7点借用 | 長嶺栄一氏旧字図作成のため来室 | 字豊見城ハリー御願見学 琉大赤嶺政信助 教授・宜保・達宏・儀間 図書館講座 | 字宜保にて発見された魚雷写真撮影 | 戦前、戦後写真展見学 於…沖尚高校 | 字上田大城見教氏より日記帳(1947、48 年分)借用 | 地域史協議会研修 於…徳之島(達宏) | 沖繩国際大学安仁屋政昭教授訪問(吉永・達宏) | 第9巻文献資料編専門部会 | 沖繩市立郷土博物館より1949年の地形図借 用 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|--------------|------------------------|--------------------|--------------------------------|-------------|------------------|------------------|--|----------------|--|-----------------------|--|----------------------|----------------------------|
| 20 | 15 | 30 | 10 | 5 | 2 | 28 | 15 | 12 | 8 | 30 | 28 | | |
| 第9巻文献資料編専門部会 | 沖繩国際大学安仁屋政昭教授訪問(吉永・達宏) | 地域史協議会研修 於…徳之島(達宏) | 字上田大城見教氏より日記帳(1947、48 年分)借用 | 字田頭の防空壕現地確認 | 字上田宜保直志氏より写真8点借用 | 第6巻戦争編専門部会(村内巡見) | 字宜保金城栄二氏来室。米国から返還された遺 品(支那事变従軍記章等)を見せてもらい、 写真撮影。 | 写真閲覧(吉永・達宏・儀間) | 字宜保金城栄二氏来室。米国から返還された遺 品(支那事变従軍記章等)を見せてもらい、 写真撮影。 | 大城正祺氏宅へ一豊小学校略図作成のため訪問 | 県立公文書館史料編集室にて1945年航空 写真閲覧(吉永・達宏・儀間) | 字豊見城照屋堅二氏より竿秤、アジマー寄贈 | 沖繩市立郷土博物館より1949年の地形図借 用 |

編集後記

◇ 豊見城村史だより(第三号)は、故・赤嶺牛一氏ほか五名の戦争体験と、故・大城盛昌氏(医師)の日記を特集した。戦争体験を共有している方、あるいは戦後生れの方にはそれぞれの読後感があると思います。ぜひ感想をお寄せ下さい。

◇ この小冊子は、村史の編集過程で発掘された新資料や、話題性のあるものを早目に紹介し、村民のご意見や提言を仰ぎながら村民参加の「村史づくり」を進める目的で発行しています。

◇ 平成八年度から村史第六卷「戦争編」の資料収集と調査を開始、九年〜十年で原稿をまとめて、平成十一年に発行する計画である。その「前ぶれ」として部分的ではあるが、戦争、終戦直後の日記をとりあげた。原稿の掲載にあたっては、執筆者および遺族の快諾を頂いたことを報告します。

(宜保)

豊見城村史だより 第3号

発行 平成9年(1997)11月25日
編集 豊見城村教育委員会 村史編纂室
901-02 豊見城村字伊良波392番地
 国立中央図書館内
 電話(098)856-3671
 FAX(098)856-8044

印刷 ・ とみしろ印刷

村史編纂室スタッフ

| | | |
|----|----|----|
| 宜保 | 喜久 | 室長 |
| 吉永 | 安三 | 係長 |
| 大城 | 達宏 | 主査 |
| 儀間 | 淳一 | 嘱託 |
| 長嶺 | 愛子 | 臨任 |